# 水の文化

特集

# 江戸が意気づくイースト・トーキョー

水の文化 October 2017 No.57

# 親水の大事

作家　山本一力

ひとしずく

大川（隅田川）の東側、深川。

「水の都」と称されることが多い深川の興りは、江戸時代初期にまでさかのぼる。

明暦三（一六五七）年一月十八日に出火した明暦の大火は、二十日になってやっと鎮火した。

消火できたわけではない。燃え尽きたのだ。大半が焼け野が原になったがため、公儀は江戸の町造りを根本からやり直す決断をした。

各地に火除け地を設けて道幅も広げ、延焼対策を講じた。江戸城天守閣まで焼け落ちたのも、延焼を防げなかったからだ。

町造りの一環として、埋め立ても断行した。慶長八（一六〇三）年の江戸開府以来、江戸の人口は膨張を続けていた。新たな居住地造成には埋め立て地での対処を決めた。

大川東側の埋め立てに際して、公儀は明確な都市計画図を作成した。江戸に廻漕される諸国からの物資集散地として、埋め立て地活用を考えたのだ。

水運に便利な水路を縦横に張り巡らせた。

江戸復興には建材となる丸太が欠かせない。いかだに組んだ材木水運の便を考慮し、大川と結んだ堀に面して木場も設けた。

材木商、川並（いかだ乗り）、大工・左官・鳶・鍛冶屋など、建築関連の商人と職人が、大挙して埋め立て地に移住した。

深川の地名は、町と町とを結ぶ掘割の多さと、水運に適した運河の深さから生まれた、ともいわれている。

＊

埋め立て地はその当初から、飲料水の確保が深刻な問題となっていた。

元来が海だった場所を埋め立てたのだ。井戸を掘っても塩辛い水しか出なかった。

承応三（一六五四）年頃には、大川の西側と、埋め立て地以外の東側である本所や亀戸には、上水道が行き渡っていた。

隅田川の東側を流れる平久川（へいきゅうがわ）と大横川の合流点。こうした堀が、江戸・東京の復興と発展に大きな役目を果たした

水道の名はついていたが、神田川や玉川などの清流を樋で張り巡らせただけだ。高低差を使った水道の果ては、江戸城の道三堀に落とされていた。

落ちる余水を船の水槽に汲み入れて、深川各所に給水した。水源（水道や井戸）に恵まれた他所では見られない、深川ならではの「水売り」稼業が存在していた。

暴れ水（洪水・水害）との闘いは、現代も日本中で続いている。

深川はしかし、埋め立て地誕生時から水とは闘うのではなく、親しんできた。

いまも青海・海辺・枝川・扇橋・塩浜・潮見・白河・豊洲・深川・若洲などなど、水にちなんだ地名が多数残っている。

親水公園では名称通りに、だれもが水に親しんで遊ぶこともできる。

川や運河には橋が架かっている。深川エリアの古い橋には「御船橋」「亀久橋」「黒船橋」「鶴歩橋」「万年橋」などのように、架橋当時を思わせる味な名称が付けられている。

水は生きる根源であり、治水はなにともまして重要であろう。

願わくば水との闘いではなく、親水を掲げて治水検討をいただけますように。

**山本一力（やまもと いちりき）**

1948年高知県生まれ。14歳で上京し、高校卒業後、旅行代理店やコピーライター、航空会社関連の商社など十数回の転職を経て、1997年に『蒼龍』で第77回オール讀物新人賞を受賞する。2002年には『あかね空』で第126回直木賞を受賞。ほかに『損料屋喜八郎始末控え』『大川わたり』『深川黄表紙掛取り帖』『だいこん』『ほかげ橋夕景』など多くの時代小説を執筆。また、自伝的小説として『ワシントンハイツの旋風』がある。

特集

# 江戸が意気づく イースト・トーキョー

東京の東側が元気だ。例えば、蔵前や清澄白河といったエリアでは、若いクリエイターたちが隅田川と関連運河の水辺のまちに魅力を感じて移り住んでいる。

振り返れば、江戸時代の江戸（東京）の中心軸は今よりも東側だった。幕府が「明暦の大火」（1657年［明暦3］）をきっかけに隅田川左岸の低湿地を開発したことで、市街地（町場）は東へと広がっていった。

今、行政や企業、住民などさまざまな担い手が、東京の東側で生み出しつつある「現代ならではの魅力」を、地域の資産である隅田川と関連運河の視点から探っていく。東京の東側「イースト・トーキョー」で起きている変化の裏には、いったい何があるのだろうか――。

## 目次


**巻頭エッセイ**

2 ひとしずく **親水の大事** 山本一力

**特集 江戸が意気づくイースト・トーキョー**

6 概論 **江戸と東京は今もつながっている** 山本博文
8 芸能 **老若男女が集う江戸随一の遊興地** 沓沢博行
12 行事 **変わることを恐れない浅草人のプライド** 隅田川 とうろう流し
14 新潮流 **ランナーたちを魅了する隅田川リバーサイド**
16 研究 **知られざる遊女たちの実像** 横山百合子
18 ものづくり **ゆるやかにつながる「職人のまち」** 蔵前ものづくり事情
24 掘割と文化 **化政文化を生んだ武士と町人の交流** 五味和之
28 材木とカフェ **江戸の掘割と現代のカフェ** 久染健夫
34 川床 **水辺を楽しむ大きなテラス** LYURO東京清澄
35 文化をつくる **よそ者を拒まない「意気」なまち** 編集部

**連載**

36 水の文化書誌48 **時を超えて世界最長のナイル川** 古賀邦雄
38 魅力づくりの教え9 **ドチャベンが教えるこれからのイノベーション 秋田県南秋田郡五城目町** 中庭光彦
42 食の風土記9 **できたての熱々を味わう島豆腐** 沖縄県那覇市
45 Go! Go! 109水系13 **山里の暮らしを縫い、平野の暮らしを紡いだ庄川** 坂本貴啓

50 センター活動報告
51 編集後記／ご案内


（敬称略）

# イースト・トーキョー Cruise Map

今回の特集で取り上げる「浅草」「蔵前」「本所」「深川」を小型船で巡り、記事と関連のある地点を撮影した。水面から見ると、どんな景色なのだろうか。

## かわいい屋形船でゆったりと

撮影協力は下町探検クルーズ「がれおん」。東京スカイツリー®の真下にある「おしなり公園船着場」や日本橋船着場などから、東京の川・掘割を遊覧する小さな屋形船だ。(扇橋閘門の改修工事が終わるまで「おしなり公園船着場」発着のクルーズは運休)

http://www.galleon.jp/

Tel.03-5858-6877

# 江戸と東京は今もつながっている

当時、世界でも有数の人口を擁した江戸。行徳の塩、周辺の農村から野菜などが川船で運ばれたが、そうした物流や人々の往来を支えたのが、隅田川と関連する運河だ。時は過ぎ、いま再び東京の東側「イースト・トーキョー」で新しい動きが生まれている。そこで1878年（明治11）の「東京15区」で浅草区、本所区、深川区だったエリアに着目し、何が起きているのかを見ていく。まずは東京大学史料編纂所教授の山本博文さんに、江戸の歴史や浅草、蔵前、本所、深川の地域特性などを教えていただいた。

## 隅田川沿いは幕府の戦略的拠点

――江戸というまちの成り立ちを教えてください。

1457年（長禄元）に太田道灌（どうかん）（注1）が江戸城を築きます。北条氏の支配を経て、1590年（天正18）に徳川家康が入城して修築します。1603年（慶長8）に征夷大将軍となった家康が幕府を開き、政治の中心地となりました。

とはいえ、江戸城の目の前まで日比谷入り江が入り込んでいたため市街地（町場）にできる土地が少ない、とても小さなまちでした。そこで家康は神田山を切り崩し、その土で日比谷入り江を埋め立てて土地を造成し、山の手（注2）は武家地、日本橋から東側は商人地とします。家康は入城後すぐに行徳からの塩をはじめ物資を運ぶために小名木川（おなぎがわ）の開削に取りかかるなど、低湿地に排水と水運のための掘割もつくります。ですが、江戸初期の町場はせいぜい隅田川の手前まででした。

――隅田川の左岸が町場となるのは、1657年（明暦3）の「明暦の大火」がきっかけですか？

当時、隅田川には千住大橋しかなく、民衆が本所や深川に逃げられなかったので甚大な被害が出ました。そこで幕府は両国橋を架け、元禄期（1688～1704）には新大橋や永代橋を架けます。それで町場が対岸の本所・深川に広がっていきます。

また、明暦の大火後の防火対策として「広小路」がつくられます。両国橋の両端にも大きな広場があり、芝居小屋や食べ物屋が並び、毎日お祭りのような賑わいでした。物資を運ぶ船が行き交い、橋の上を人が行き来し、橋のたもとには繁華街があって景色もいい。隅田川は人々が集うってつけの場所だったのです。

また、隅田川沿いには、右岸の蔵前に年貢米を納める「御米蔵（おこめぐら）」、左岸の本所に竹を置く「御竹蔵（おたけぐら）」などがありました。つまり幕府の戦略物資の拠点だったのです。さらに小名木川など隅田川に通じる掘割に沿って藩邸や蔵屋敷がつくられます。あまり知られていないことですが、諸藩は幕府から与えられた上・中・下の三つの屋敷だけでなく、町人の名義で屋敷を購入して物資の集積所としていました。隅田川と関連する運河にはそういう役目もあったのです。

## 浅草、蔵前、本所、深川のそれぞれの個性

――江戸の人口や範囲は？

元禄期の経済発展で江戸のまちは急速に大きくなり、享保期（1716～1736）の人口は100万人に達したといわれています。同時期のロンドンやパリと比べても江戸の方が人口は多かったようです。

やがて「どこまでが江戸なのか」が問題になり、1818年（文政元）、地図上に赤い線（朱引）を引いて「ここまでが江戸」と定めました。同時に江戸町奉行の管轄する範囲も黒い線（墨引）で示されたのです。

――それぞれのまちの特徴とは？

インタビュー
山本博文さん
東京大学史料編纂所 教授

**Hirohumi Yamamoto**
1957年（昭和32）、岡山県津山市生まれ。東京大学文学部国史学科卒業。文学博士。1992年、『江戸お留守居役の日記』で日本エッセイスト・クラブ賞。著書に、『流れをつかむ日本の歴史』『武士の評判記』『日本史の一級史料』『歴史をつかむ技法』『決定版 江戸散歩』など多数。角川まんが学習シリーズ『日本の歴史』の全巻監修。NHK BS時代劇「一路」「雲霧仁左衛門」などの時代考証も手がける。

**（注2）山の手**
江戸城の近辺と西にあたる高台。地理的には武蔵野台地の東端。

**（注1）太田道灌**
1432-1486。室町中期の武将。上杉定正の執事となり、江戸城を築城。兵法に長じ、和漢の学問や和歌にも優れた。

浅草は、幕府が開かれる前から浅草寺を軸とする「信仰の地」として発展していました。浅草寺の縁起は飛鳥時代（628年［推古天皇36］）とされ、隅田川で漁師の兄弟が網ですくった観音様を祀っていますね。庶民信仰の場として門前町が栄え、見世物小屋なども増えていきます。

御米蔵が並んでいた蔵前は、旗本・御家人のために俸禄米を換金する札差（ふださし）が集まるほか、米と一緒に運び込まれる各地の産物も商いの対象でした。幕府が消えると御米蔵も不要になりますが、今も「流通の要」のまま。さまざまな業種の問屋街です。

**――本所には終生ここから離れなかった葛飾北斎がいました。**

本所は、元禄期に吉良上野介の屋敷が移されるなど割と初期から開けていて、新興の芸術家たちも住んでいました。ただし、今とは違って芸術家の地位は高くなかった。著作権の概念がありませんから、一作書いてギャラをもらったらそれで終わり。北斎も、ベストセラー作家だった滝沢馬琴も裕福ではなかった。でも、だからこそ新しい文化をつくる気概と活力が生まれたともいえます。

深川は商人のまちですね。物流に携わる人が多かったので、気っ風（ぷ）もいいし元気もある。飲み水には苦労したけれど、日本橋に近いのに家賃はそれほど高くない。埋め立てがどんどん進み、人は住み着いていく。その様に発展の可能性を見出し、さらに人が集まったのでしょう。

## レトロなまちとして再評価される東側

**――今の東京の東側（イースト・トーキョー）をどう見ていますか？**

山の手と比べて庶民的ですね。例えば西側の池袋や新宿周辺はかつて江戸に住む人のための野菜などの生産地でしたが、昭和30年代から一気に開発が進みます。水に乏しい武蔵野台地が玉川上水とその分水などで潤い、「みんなが住みたがる」地域になりました。

それに対して東側は、少し取り残された感もありましたが、逆に今は「レトロなまち」として再評価されています。震災や戦災で焼け野原になりましたが、復興のときの雰囲気が残っているからでしょう。

時代ごとの変遷はあるものの、今でも本所や深川に下町っぽさが色濃く残っているように、昔からの土地の気質や記憶は続いているものです。江戸時代の切絵図（注3）を片手に東京を歩くと、大きかった稲荷神社が今はマンションの前でこぢんまりと、でもちゃんと残っていたりする。東京をそういう目で見ると、江戸とつながっていることに気づくでしょう。東京の東側、特に隅田川周辺に着目すると、江戸に対する興味はより高まると思いますよ。

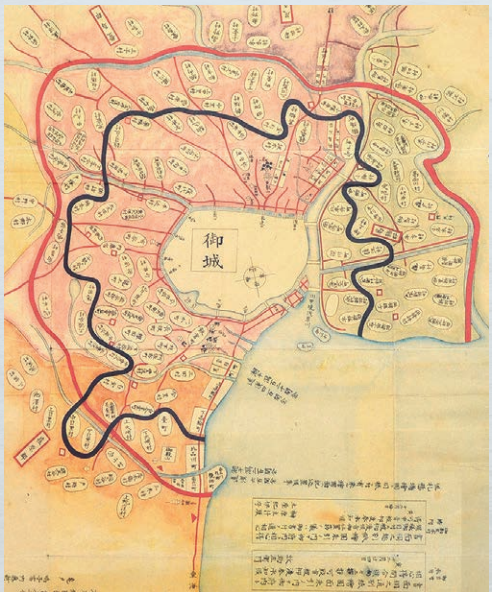
（2017年8月21日取材）

### イースト・トーキョー略年表

（今回の特集にまつわる主な出来事。編集部作成）

| 西暦 | 和暦 | 出来事 |
|---|---|---|
| 628 | 推古天皇36 | 檜前浜成（ひのくまのはまなり）、竹成（たけなり）兄弟が土師中知（はじのなかとも）と浅草観音を祀る |
| 1457 | 長禄元 | 太田道灌が江戸城を築く。のち北条氏の支城に |
| 1590 | 天正18 | 徳川家康が江戸入府し、小名木川を開削する |
| 1596 | 慶長元 | 深川八郎右衛門らが深川を開拓 |
| 1603 | 慶長8 | 徳川家康が江戸に幕府を開く |
| 1617 | 元和3 | 葺屋町（日本橋人形町）に傾城町創設（吉原遊郭） |
| 1620 | 元和6 | 幕府が浅草に米蔵をつくる |
| 1624 | 寛永元 | 長盛法師が深川永代島に富岡八幡宮を祀る<br>中村勘三郎が江戸猿若座（のちの中村座）を創設 |
| 1657 | 明暦3 | 明暦の大火で江戸市中の大半が焼失<br>吉原遊郭が浅草千束に移転し新吉原ができる |
| 1659 | 万治2 | 隅田川に両国橋が架けられる（時期は諸説ある） |
| 1658~60 | 万治年間 | 北十間川、竪川、横十間川、大横川が開削される |
| 1661 | 寛文元 | 小名木川の船番所が中川口へ移転 |
| 1680 | 延宝8 | 松尾芭蕉が深川に移り住む |
| 1701 | 元禄14 | 佐賀町の町場化が進み「蔵のまち」となる |
| 1702 | 元禄15 | 赤穂浪士が本所の吉良屋敷を襲い<br>上野介義央を討つ |
| 1724 | 享保9 | 浅草蔵前の「札差」が109人に定められる |
| 1733 | 享保18 | 隅田川の水神祭で花火が上がる |
| 1734 | 享保19 | 幕府の材木蔵が本所横網から猿江に移る |
| 1760 | 宝暦10 | 葛飾北斎が本所（墨田区亀沢付近）で生まれる |
| 1807 | 文化4 | 富岡八幡宮祭礼の群衆により永代橋が落橋する |
| 1842 | 天保13 | 日本橋から浅草猿若町に中村座と市村座が移転<br>岡場所取り締まりで深川花街も取り払われる |
| 1853 | 嘉永6 | 浅草花やしきが植物園として開園 |
| 1867 | 慶応3 | 大政奉還により江戸幕府崩壊 |
| 1868 | 明治元 | 明治維新。江戸を東京と改称 |
| 1872 | 明治5 | 芸娼妓解放令が発令される |
| 1875 | 明治8 | 工部省深川工場で日本初のセメント製造開始 |
| 1886 | 明治19 | 佐賀町に深川正米市場が開かれる |
| 1903 | 明治36 | 浅草六区に日本初の常設映画館（電気館）が設立 |
| 1917 | 大正6 | 浅草の常盤座で大衆オペラが上演される |
| 1923 | 大正12 | 関東大震災が起こる |
| 1933 | 昭和8 | 浅草の常盤座で古川ロッパらが「笑いの王国」旗上げ |
| 1945 | 昭和20 | 終戦 |
| 1946 | 昭和21 | 浅草復興祭で戦災者慰霊の灯篭流しを実施 |
| 1947 | 昭和22 | 東京都の35区が整理統合。<br>台東区（下谷区+浅草区）、墨田区（向島区+本所区）、<br>江東区（深川区+城東区）が誕生する |

参考文献：『重ね地図で江戸を訪ねる 上野・浅草・隅田川歴史散歩』（台東区2014）『江東区中川船番所資料館 常設展示図録』（江東区教育委員会2003）『深川江戸資料館 展示解説書』（江東区文化コミュニティ財団2017）『大江戸万華鏡―人づくり風土記13・48』（農文協1991）『日本史年表 第四版』（岩波書店2016）など




1818年（文政元）の「江戸朱引図」。幕府が地図上に赤い線（朱引）を引いて「ここまでが江戸」と定めたもの。範囲は、東は中川、西は神田上水、南は南品川町を含む目黒川辺、北は荒川・石神井川下流まで。江戸町奉行の管轄する範囲は黒い線（墨引）。墨引が目黒付近で膨らんでいるのは、大円寺の門前町を管轄するには大名が務める寺社奉行よりも、取締能力の高い町奉行の方が適切と判断したからという（東京都公文書館蔵）

**（注3）切絵図**

江戸時代につくられた地図の一種。詳細を記すために、特定の地域を分割した。

# 老若男女が集う江戸随一の遊興地

## 浅草の賑わい今昔

628年（推古天皇36）に創建された都内最古の寺院「浅草寺」。今の本堂は1958年（昭和33）に建立されたもの

1911年（明治44）の浅草寺仲見世の賑わい（『東京風景』より）

金龍山浅草寺を中心とする浅草周辺は、かつて江戸随一の賑わいを見せる遊興地だった。実は、浅草寺と隅田川は縁が深い。漁師の兄弟が隅田川からすくった菩薩像が浅草寺のご本尊なのだ。東京都江戸東京博物館学芸員の沓沢博行さんに、浅草周辺の移り変わりを紐解いていただいた。

浅草案内人
**沓沢博行さん**

**Hiroyuki Kutsusawa**
東京都江戸東京博物館 都市歴史研究室 学芸員。2008年（平成20）に企画展『浅草今昔展』を担当。江戸から明治・大正期にかけての浅草の歴史と文化を研究。

### 隅田川から現れた観音様

**❶駒形堂**

今も昔も大勢の人で賑わう「浅草」。特に東京へ来た外国人観光客は必ずといっていいほど訪れる人気スポットだ。しかし、せっかく浅草に来ても、雷門や仲見世だけをピンポイントで見て終わりという人も多い。

歴史を遡れば、より広範な浅草というエリア一帯が、聖と俗とがひしめき合う巨大なワンダーランドだった。老若男女を魅了した「浅草」の魅力とは何だったのか。浅草の歴史に詳しい沓沢博行さんと浅草を歩いてみた。

浅草駅から沓沢さんが最初に向かったのは、隅田川沿いを少し下ったところにある「駒形堂」。浅草寺発祥の霊地に建つお堂だ。

「浅草寺と隅田川には深いつながりがあるのです」と沓沢さん。

628年（推古天皇36）、隅田川で漁をしていた檜前浜成（ひのくまのはまなり）、竹成（たけなり）という兄弟が、網にかかった一体の仏像を今の駒形堂のある場所で引き上げ、草ぶきのお堂に祀（まつ）った。それが浅草寺のご本尊、聖観世音菩薩像の由緒とされる。その後、地元の名士、土師中知（はじのなかとも）が私宅を寺に改め、観音像を大切に祀ったことで、浅草寺の歴史が始まった。ちなみに浅草神社の三社様とは、檜前兄弟と土師中知の3人を神として祀ったものだ。

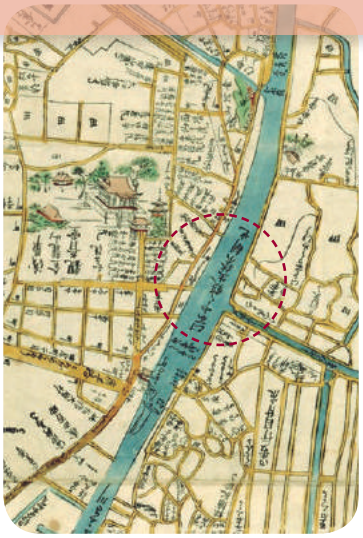
観音様が示現（じげん）した隅田川は神聖なものとされ、1692年（元禄5）には、このあたりの川で殺生を禁止するお触れが出されている。

### 絶景かな、絶景かな

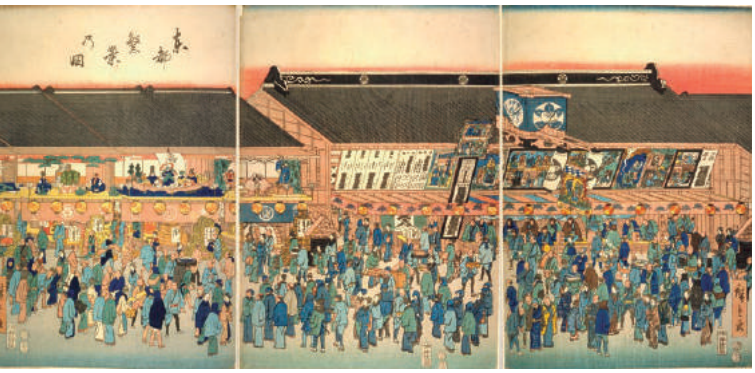
**❷待乳山聖天、山谷堀、猿若町**

駒形堂から踵を返し、隅田公園をしばらく歩くと、左手に浅草寺の子院「本龍院・待乳山聖天（まつちやましょうでん）」がある。浅草寺から離れているためか、広い境内には人もまばらで、落ち着いた空間だ。ここの聖天様には大根をお供えする習わしがあり、社務所の前に生の大根が大量

浅草寺のご本尊が祀られたという「駒形堂」。かつては川側に向いていたが、時代とともに川を背にするようになった

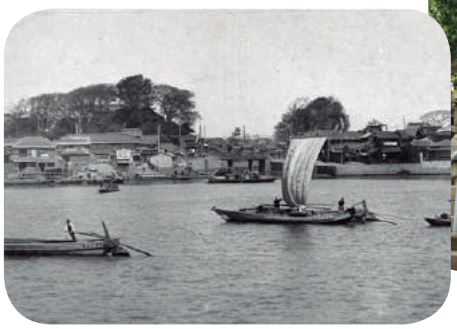


隅田川に「殺生禁断也」と記された絵図「増補江戸大絵図 絵入(部分)」(1682年[天和2]刊)



浅草猿若町「市村座」の賑わい。広重画『東都繁栄の図』の「猿若町三芝居図」より(1854年[安政1]刊)。

小高い丘にある待乳山聖天。かつてはもっと高い山だったが、周囲の埋め立てのために削られたとされる



1911年(明治44)、対岸の向島から見た待乳山。中央にあるのが今戸橋で、山谷堀はここから始まる

に並べられている。

待乳山という名の通り、小高い丘に建つ本院は、江戸時代には向島の桜や富士山などが見渡せる下町随一の絶景スポットだった。すぐ下には山谷堀が通っており、今戸橋があり、その脇には料亭も立ち並んでいたという。

山谷堀は人工の水路で、隅田川から幕府公認の遊郭、新吉原あたりまでを結ぶ重要な交通ルートだった。当時は、猪牙船と呼ばれる小舟に乗って山谷堀を上り、吉原に遊びに行くのが「粋」とされていたのである。堀は戦後埋め立てられ、現在は山谷堀公園としてその名を留めている。

その山谷堀公園から浅草寺へ向かう途中、旧浅草猿若町を通った。古い建物もないごく普通の道なので、知らなければ素通りしてしまうだろう。猿若町は天保の改革(1841~43年)により、中村座、市村座、森田座の歌舞伎三座が集められ、江戸後期は芝居のまちとして栄えた。沓沢さんは「歌舞伎は庶民にとって一番の娯楽で、歌舞伎役者は現代のアイドルやファッションリーダーのような存在でした。男性は吉原へ、女性は猿若町の歌舞伎見物へ、というのが浅草の楽しみ方の一つのパターンだったのです」と語った。

## 多彩な神仏が同居する聖地

### ❸二天門から浅草寺本堂へ

馬道通りから二天門をくぐり、浅草寺境内へ入る。本堂の東側に建つこの二天門は、江戸時代初期に建てられたもので、国の重要文化財に指定されている。ただし、建立当時の名称は「随身門」。門の左右に祀られていたのは、豊岩間戸命、櫛岩間戸命という神道の神様だった。それが明治に入り、神仏分離の命によって2体の像はすぐ隣の浅草神社に移され、代わりに鶴岡八幡宮から来た持国天と増長天という仏教の四天王2体が左右に据えられて、名前も二天門に改められた。門が同じまま神仏が入れ替わるというのは不思議な

今回歩いた主なポイント。赤色部分は本文に関連するかつての町名や街区(台東区発行『重ね地図で江戸を訪ねる 上野・浅草・隅田川 歴史散歩』などを参考に編集部作成)

p8-11で所蔵元の記載がない絵図・浮世絵・古写真は、すべて国立国会図書館蔵

浅草寺本堂の裏手はかつての「奥山」。無屋根の見世物小屋が立ち並んでいた。
今は九代目市川團十郎の歌舞伎十八番「暫（しばらく）」の銅像がある

（上）浅草寺の馬道通り側にある二天門。1649年（慶安2）ごろの建築とされる。浅草神社、伝法院とともに東京大空襲による消失を免れた
（左）檜前兄弟と土師中知の3人を祀った浅草神社（三社権現社）

日本最古の遊園地とされる「浅草花やしき」。集客のために動物を入れ、生き人形を展示し、映画も上映した。写真左は1930年（昭和5）発行の絵葉書「浅草公園花屋敷」（東京都立中央図書館蔵）

感じだが、そうした大らかな多様性も浅草寺の魅力だと沓沢さんは言う。

「浅草寺は研究者の間で『神仏のデパート』とも称されるように、子院が多く、境内にもたくさんのお社（やしろ）があって、多彩な神様、仏様が祀られています。人それぞれ願い事が違っても、とにかく浅草寺に来れば誰もが自分にぴったりの神仏を拝めるわけです。たくさんの人が参拝に来る理由もわかる気がします」

浅草寺本堂は、第二次世界大戦で焼失したが、人々の心のよりどころとなるよう、すぐに仮本堂がつくられ、なんと終戦の3カ月後には参詣できるようになっていたという。

## 本堂裏は江戸随一の盛り場

### ❹奥山、花やしき

その浅草寺本堂の裏手に回ると、広い駐車場になっている。実はこのあたりが「浅草奥山（おくやま）」と呼ばれる江戸の盛り場の中心部。当時は数々の見世物小屋が所狭しと軒を連ね、相当な賑わいだったらしい。

「見世物小屋というと怪しげなイメージですが、実際は手の込んだ工芸品や巨大なからくり人形が展示されていたり、独楽回しや綱渡りといった曲芸、手品などを披露したりと、大人も子どもも楽しめる多種多様な興行が行なわれていました」（沓沢さん）

両国では、「大イタチ」をうたって、小屋に入ると大きな板（イタ）に血（チ）がついているだけだった、なんていう見世物もあったそうだが、江戸の人はそれも洒落として楽しんだのだろう。人々が喜ぶ新しいもの、おもしろいものが集まる娯楽の殿堂が奥山だったのだ。

奥山とされるエリアは広く、日本最古の遊園地として今も営業する「浅草花やしき」もその一画にある。花やしきができたのは、なんと1853年（嘉永6）。開園した当初は植物園だった。

## 雑多な魅力が混在する

### ❺浅草公園六区、仲見世

明治時代になると、浅草寺の寺領は東京府に公収され、公園地として整備されていく。1883年（明治16）には浅草寺の西側に大池が造成され、掘り出した土で田んぼが埋め立てられて、そこに奥山地区の見世物小屋がごっそり移転された。これが浅草公園六区（浅

平日でも多くの人が集う浅草寺の仲見世。聖と俗がまぜこぜになった不思議な雰囲気がある

地方の魅力が体験できる商業施設などがオープンし、賑わいを取り戻しつつある浅草六区。写真下は1922年（大正11）ごろ発行の絵葉書「浅草公園六区活動街」。大衆娯楽、映画など日本のエンターテインメントの中心地だったことがわかる（東京都立中央図書館蔵）

1907年（明治40年）、浅草四区で昆虫館としてスタート、今は大衆演劇の劇場として営業を続ける「木馬館」

大池とその向こうにそびえる12階建ての「凌雲閣」。1890年（明治23）築で「（浅草）十二階」と呼ばれた。10階までは総煉瓦造り、11・12階は木造の楼閣だったが、関東大震災で半壊し取り壊された

草六区）の始まりである。

「奥山を移転した背景の一つには、火事が起きやすい見世物小屋を浅草寺から離したいという思惑がありました。六区と浅草寺の間には大池があるので、火事が起きても延焼を防げるのです」

興行街として人工的に誕生した浅草六区は、当然のように文化の発信地になっていく。その先頭を切ったのが、1887年（明治20）に開場した「常盤座（トキワ座）」だ。ここでは歌舞伎や新派劇の興行、そして映画の上映などがいち早く行なわれ、さらに大正期には浅草オペラを初めて上演し、大ブームの火付け役となった。当時、浅草オペラに傾倒した人は「ペラごろ」（注）と呼ばれ、なかには宮沢賢治もいたという。そのほか、系列劇場との三館共通チケットの導入や日本初のストリップショー公演など、トキワ座が始めた新しい取り組みは多い。

少し離れた浅草四区には、1899年（明治32）に「浅草公園水族館」という日本初の私設水族館が開業した。ここは水族館でありながら、昭和になると2階が演芸場になり、喜劇スターとなる榎本健一が劇団「カジノ・フォーリー」を旗揚げしたことで知られている。浅草公園水族館はもうないが、隣接する「木馬館」は今も演芸場として営業を続けている。

昭和初期以降、浅草六区には映画館や劇場が林立し、健全なエンターテインメントから猥雑なものまで何でもありの一大歓楽街として隆盛を誇った。しかし1960年代にテレビが登場し、娯楽が多様化して映画人気が下火になると、浅草六区も往年の勢いを失っていく。1991年（平成3）にトキワ座が閉鎖され、浅草六区の一つの歴史が幕を下ろした。

浅草六区を後にして浅草寺境内へ戻る。仲見世に出ると、平日にもかかわらず人でごった返している。その喧騒に、ふと江戸の景色が重なって見えた気がした。

「浅草のまちなみはかなり変貌しているので、知識がないと昔を偲ぶことは難しいかもしれません。でも、少し歴史を知るだけで、浅草というまちの魅力がぐっと身近になるのではないでしょうか」と沓沢さん。

漁師の兄弟が隅田川ですくった仏像を祀る浅草寺を中心に、さまざまな娯楽が密集し、人を飽きさせることがないまち、浅草。何でもありの雑多でエネルギッシュな包容力が、万人を惹きつけるのだと感じた。

（2017年8月18日取材）

**（注）ペラごろ**

大正末期、オペラに熱中して女優を追い回したり劇場に出入りしたりした青年。「オペラごろつき」あるいは「オペラジゴロ」の略といわれる。

# 変わることを恐れない浅草人のプライド

## 隅田川 とうろう流し

水質浄化が進み、さらに人々の憩いの場となる親水テラスが整備された隅田川。その吾妻橋のたもとで毎年8月に行なわれるのが、12年前に復活した「隅田川 とうろう流し」だ。関東大震災や東京大空襲などで亡くなった方々の霊を悼むために戦後始まったこの催しは、約40年の休止期間を経て、今は老若男女、国籍を問わず多くの人が集うようになった。その裏には、「変わることを恐れない」浅草の人たちのプライドが隠されていた。

### 途絶えかけていたとうろう流しを復活

「僕が子どものころ、隅田川はとにかく臭かった。近づかなかったですよ」

そう話しはじめたのは、浅草観光連盟事務局で広報を担当する飯島邦夫さん。連盟といっても浅草を盛り上げようとする地元旦那衆を中心とした集まりで、堅苦しいものではない。飯島さんの実家も

隅田川の吾妻橋上流にある親水テラスから流されたとうろう。
人々のさまざまな思いを載せて川面を下っていく

（右上）浅草観光連盟の広報担当、飯島邦夫さんと、飯島さんたちが設計した流灯台　（右下）外国語で書かれたとうろう。近年は外国人観光客の参加も増えている　（左）ここ数年は、鎮魂よりも、自分や親しい人たちの幸せを願う内容が多いという

合羽橋で祝儀袋屋を営んでおり、自身も観光関連の企業を経営しているという。

観光連盟では、ほぼ毎月のペースでなんらかの行事を実施しており、隅田川のとうろう流しもその一つだ。終戦翌年の1946年（昭和21）に始まった歴史あるもので、戦火で焼かれた浅草の再興のために立ち上がった浅草復建自治会（観光連盟の前身）が、浅草寺などと協力して実施した「浅草復興祭」の一環として行なわれたのが最初であるという。その後、20年にわたり続けられたが、隅田川の護岸工事が実施され川辺に人が降りられなくなったことから1966年（昭和41）に一度中止された。それが、隅田川親水テラスの設置など川岸の再整備が進んだのを受け、飯島さんたちが2005年（平成17）に復活させ現在に至る。

復興から高度経済成長に向かっていった1950～60年代には隅田川の水質悪化の問題が発生。とうろう流しのほかにも、名物だった寒中水泳（1953年［昭和28］に中止）、伝統あるボート競技大会である早慶レガッタ、花火大会のルーツでもある隅田川花火大会（ともに1961年［昭和36］に中止）と、多くの行事が開催不能に追い込まれた。

当時の観光連盟は事態を打開すべく隅田川浄化のための運動の先頭に立った。住民と力を合わせ台東区議会などに粘り強く働きかけた結果、沿岸から流れ込む工場排水の処理施設建設や川底の汚泥の浚渫、下水道の普及などが実現し、水質は徐々に改善する。早慶レガッタと花火大会は1978年（昭和53）に再開された。

飯島さんたちがとうろう流しを復活させたのも、途絶えかけた伝統行事を再興させてきた連盟の姿勢を踏襲したものなのだ。

## 浅草の四季折々の催しを地道に続けていくこと

「復活当初は、かつてに倣い戦災者の慰霊を目的にしていました。参加していたのも浅草で暮らす方がほとんど。そんなときに東日本大震災が起きて雰囲気が変わった。復興や未来への願いを自由に託す、つまり七夕の短冊みたいなものになっていったのです。それが外国人観光客にも伝わって大きくなっていった。『参加できるアクティビティ』というところが受けているんでしょうね」

18時。とうろう流しが始まると、流灯台（りゅうとうだい）（隅田川にとうろうを流し入れるための木製のスロープ）に参加者が長い列をなす。岸辺は幻想的な風景を見ようと集まった見物客で埋め尽くされた。ゆらゆらとろうそくの火が揺れる橙色のとうろうが水面を流れていく。その風景は日本の夏の風情そのものだ。

ただし、これはかつての鎮魂のためのとうろう流しが変わりゆく様でもある。浅草が「変わっていく」ことについてどう思うのか。

「浅草に来てくれる人が増えるのであれば、なんでもやるのが僕らですから」

そう言って飯島さんは笑う。観光客に喜んでもらうのが大事。続いてこその伝統ということか。だが、それでいて浅草の伝統に強い敬意と愛情を抱いている。そこに強さがある。

「浅草ってね、東京五輪の後にテレビが普及したことで活気を失ったことがあるんです。そのころ、僕らの先輩たちは地元をまた盛り上げるために、浅草の風情や伝統を徹底的に研究した。そして浅草で行なわれてきた四季折々の催しを地道に続けていけば、人は戻ってくると考えたんです」

その考えが正しかったことは、今の浅草の賑わいが証明している。先輩たちの意思を継ぐべく、飯島さんたちは「寺子屋」と称し、年長者から浅草の歴史を学ぶ機会を重ねている。いずれは伝える側の役を担うことになるからだ。

さまざまなものを受け入れる懐の深さ。伝統を守る意思。その両立に浅草で生きる者のプライドを見た。

（2017年8月12日取材）

# ランナーたちを魅了する隅田川リバーサイド

今、ランナーたちに大人気のスポットがある。隅田川リバーサイドだ。皇居周辺よりも道幅が広いうえ、水際を走れるので爽快感が違うという。潤いのあるこの水辺、実は洪水対策と表裏一体のものだった。

東京都公園協会が発行した『隅田川リバーラン&ウォークマップ』

隅田川リバーサイドを走るランナー。川岸にシャワーやロッカーを備えたカフェがオープンするなど、利用しやすい環境が整いつつある

## 貴重なオープンスペースでラン&ウォークを

両岸に沿って遊歩道や緑地が整備されている隅田川テラス。さわやかな川風に吹かれながらランニングやウォーキングに汗を流す人たちの姿が目立つ。舗道の幅が広く、自転車は通行禁止なので、安全で快適に走り、歩けるのがうれしい。

公益財団法人東京都公園協会は、2015年に『隅田川リバーラン&ウォークマップ』を発行した。信号に中断されない約5㎞のおすすめ4コースをガイド。冊子のQRコードを読み取ればスマートフォンにもマップをダウンロードできる。

「川べりは都市の貴重なオープンスペース。ラン&ウォークで健康的に隅田川テラスを使い、もっと多くの方々に水辺の魅力を感じていただきたい」(東京都公園協会水辺事業部・渡辺千秋さん)との狙いで制作したものだ。

マップは都内の公園や沿岸区の観光案内所などで配付。新富町のホテルが、マップとタオルと水を特典に付けた宿泊プランを提供して好評を博し、他の宿泊施設にも波及。近隣住民も観光客も入り交

東京都建設局河川部低地対策専門課長の冨澤房雄さん（中）、計画課の榮麻希さん（左）、計画課課長代理の遠藤英樹さん（右）

かつての「カミソリ堤防」が徐々に親水スペースとなりつつある（提供：東京都建設局）

公益財団法人 東京都公園協会水辺事業部の渡邉陽一さん（右）と渡辺千秋さん（左）

地域住民「花守さん」が手入れをする花壇。町会に関係したグループが多いという（提供：東京都公園協会）

じって、隅田川テラスはランナーとウォーカーの新スポットになりつつある。

## 防災を目的とする「根固め」がテラスに

隅田川テラスの整備は、1985年（昭和60）に東京都が着手した「スーパー堤防」整備事業の一環として進められてきた。旧来のコンクリート直立型のいわゆる「カミソリ堤防」は、高潮による水害からまちと人々の暮らしを守る一方で人と川を隔ててしまう。対して盛土による幅の広い堤防用地と緩やかな勾配をもつスーパー堤防は安全性と耐震性に優れるうえ、潤いのある水辺を復活させ、人を招き寄せる。

都は隅田川の背後の市街地再開発や建て替え事業などのタイミングに合わせてスーパー堤防も同時に整備。現在、両岸総延長46kmのうち約3割がスーパー堤防化されている。

「スーパー堤防には盛土による荷重を支えるための根固めが必要です。それが堤防の川側のスペースつまり『テラス』にあたります。こちらの整備を先行して進めてきました」（東京都建設局河川部低地対策専門課長・冨澤房雄さん）。

スーパー堤防に不可欠の機能を提供する隅田川テラスが、ひと足お先に水辺の潤いを取り戻しているわけだ。

神田川、日本橋川との合流部や水門など、隅田川テラスが分断されている箇所がある。「水門の耐震工事などと合わせ、スロープや橋などを設置して、連続してラン&ウォークできるように整備している」と冨澤さんは話す。

また、隅田川テラスの夜間照明も整備中。夏場は気温の下がる夜間にランニングやウォーキングしたい人は多いし、防災目的もある。「壁を照らしたりするなど、橋梁のライトアップをテラスが引き立てるための統一したデザイン」（河川部計画課・榮麻希さん）で整備するという。

## 花壇を世話する地域の「花守さん」

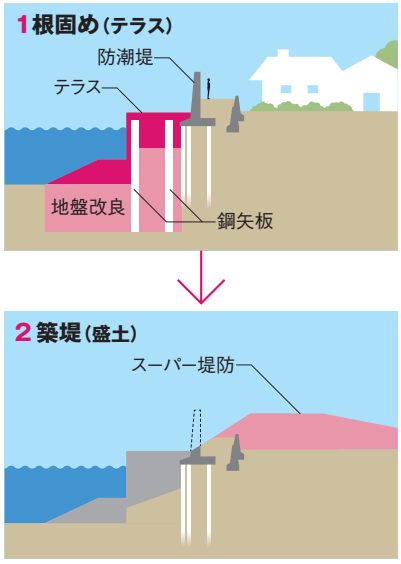
隅田川テラスを歩くと目につくのは季節の花々。水辺に憩う人たちの目を楽しませる花壇は「花守（はなもり）さん」と呼ばれるボランティアの地域住民が世話をしている。

花苗の多くは東京都公園協会が提供し、花守さんのグループが春と秋に花を植え、テラスの散水栓の鍵を預かり、用意したホースを使って水やりをする。川辺の花壇は日陰がなく照り返しも強いので、盛夏になると週に2回以上の水やりが必要だ。

「墨田、台東、中央、江東の4区で20団体ほどあり、400名を超える花守さんが活動されています。皆さんとても熱心です。隅田川の特長は地域の方々がテラス管理の一部を担っていること」（東京都公園協会水辺事業部調整課水辺公益係長・渡邉陽一さん）

親水環境のハードとソフトを整備するのは行政の役割だが、ふだん気持ちよく使えるように気を配るのは、川を大切にし、水辺の草花を愛でる近隣の人たち。隅田川テラスを快適にラン&ウォークできる裏には、地域住民によるこうした地道な公益活動があることを忘れてはならないだろう。

（2017年8月23日取材）




「根固め」のしくみ
1 スーパー堤防化に先立ち、川側の地盤を改良するために鋼矢板（こうやいた）を打つなど補強を行なう。これがテラスとなる
2 再開発や建て替えに合わせてスーパー堤防を築き、カミソリ堤防は撤去する（東京都建設局の資料をもとに編集部作成）

# 知られざる遊女たちの実像

## 新吉原遊郭最新研究

かつて色街や遊郭は、川や海、橋といった水辺に多く存在していた。こうした場所について民俗学の分野では数多の研究がなされている。浅草の外れにあった江戸唯一の公認遊郭、新吉原も四方を堀で囲まれた場所だったが、浮世絵などで伝わるきらびやかなイメージとは裏腹に、遊女たちの実態はあまり知られていないのではないか。そこで幕末維新期の都市社会とジェンダーを研究する国立歴史民俗博物館教授の横山百合子さんに、新吉原遊郭の社会的位置づけや遊女たちの抗議運動など、知られざる実像を語っていただいた。

「古今名婦伝 万治高尾」
歌川豊国（3世）
万治高尾は二代目高尾太夫とされる。太夫とは美貌と教養を兼ね備えた最高位の遊女に与えられる称号。傍らの童女は遊女の身の回りの世話をする禿（かむろ）（国立国会図書館蔵）

### 吉原遊郭に与えられた「役と特権」

1617年（元和3）、庄司仁右衛門という遊女屋の主人が幕府から認可を得て、今の日本橋近くに幕府公認の遊郭が開設されました。それが吉原の始まりです。その後、吉原遊郭は、1657年（明暦3）の明暦の大火を機に浅草の外れに移転し、「新吉原」と呼ばれ幕末まで繁栄を続けます。

幕府公認とは、役と特権が与えられることを意味します。当時の江戸は、男女比がおよそ2対1と男性が圧倒的に多く、売春が横行して混沌としていました。武家政権の幕府にとっては、特に武士という男性主体の集団の統制を図るためにも、性産業の掌握と管理は重要な課題でした。そこで吉原のみに売春業を営む特権を与え、江戸市内の性的秩序を維持するという役割を担わせたのです。このように江戸幕府は、特定の町や集団にさまざまな役割を与え、特権を認めることで、社会全体を統治していました。

公的に位置づけられた吉原遊郭は、経済面でも社会のシステムにしっかり組み込まれていました。遊女屋は寺社名目金貸付という、幕府の後ろ盾がある金貸しから多額の融資を受け、また、収益の一部を上納金として幕府に納めていたのです。1868年（明治元）に東京府が江戸町奉行所機構を引き継いだ時期の史料を見ると、旧町奉行所や東京府の金銭収入の12%を遊女屋上納金が占めています。売春業は、非常に重要な資金源でもあったのです。

### 凄惨を極めた遊女たちの境遇

役と特権によって守られていたのは遊女屋であって、遊女ではありません。遊女たちは、農村の口減らしや、親の借金のカタなどとして、牛や馬のように売買され、一方的に性的搾取をされる存在でした。新吉原には、時代によって3000人から5000人の遊女がいましたが、大夫とか呼出などといわれる高級遊女はごくわずかでした。

18世紀終わりごろになると、新吉原はさらに下層化、大衆化していきます。遊女屋の経営は次第に厳しくなり、「遊女大安売り」を打ち出すなど、遊女たちの置かれている環境はより劣悪になっていきました。高級遊女を目指して生き抜こうとする遊女もいましたが、19世紀以降、吉原では反抗する遊女による放火が頻発します。

1849年（嘉永2）に、梅本屋の遊女16人が共謀した放火未遂事件が起きました。彼女たちは付け火をし、鎮火の騒ぎに紛れて名主役宅に駆け込んで経営者の非道を訴え、自らの正当性を主張して裁きを受けようとしたのです。このときの調書のなかに、遊女が書いた覚え帳という日記が残されています。そこには、腐ったご飯しか

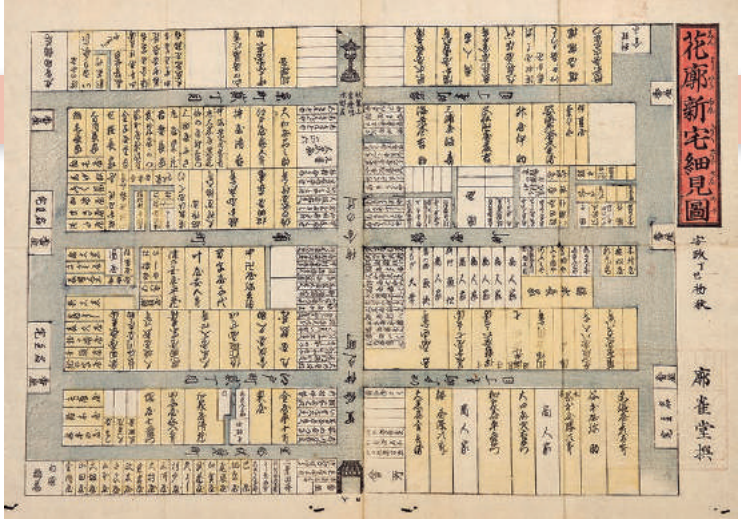
インタビュー
横山百合子さん
国立歴史民俗博物館
教授

**Yuriko Yokoyama**
東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）。千葉経済大学経済学部教授、帝京大学文学部教授を経て、2014年国立歴史民俗博物館教授に就任。専門分野は日本近世史、ジェンダー史。

**（注）マリア・ルス号事件**

1872年（明治5）、修理のため横浜港に寄港したペルー国船「マリア・ルス号」から奴隷状態に置かれていた清国人苦力（クーリー）が逃げ出して助けを求め、裁判となる。苦力は解放されたが、裁判では日本国内の奴隷売買として遊女・娼妓の例が指摘された。

「東都三十六景 吉原仲之町」
歌川広重(2代)
大門から遊郭の中央を貫く「仲ノ町通り」の桜。満開の桜は移植したもので、盛りを過ぎると撤収されたという(国立国会図書館蔵)




「花廓新宅細見図(はなくるわしんたくさいけんず)」廓雀堂主人
1855年(安政2)の安政大地震の2年後、復興した新吉原遊郭の案内図。中央下の「大門」から真っすぐ延びる「仲ノ町通り」の両脇には、客を遊女屋に紹介する「引手茶屋」が並ぶ。大門に近い大きな区画が「大見世」と呼ばれる老舗のエリア(東北大学附属図書館蔵)

食べさせてもらえないとか、瀕死になるほどの折檻を受けたといった凄惨な日常が、遊女自身の話し言葉で赤裸々に綴られています。吉原では、仕置きは必要なものというのが基本的な考えであり、遊女たちは時に暴力によって支配されていたのです。

## 芸娼妓解放令がもたらしたもの

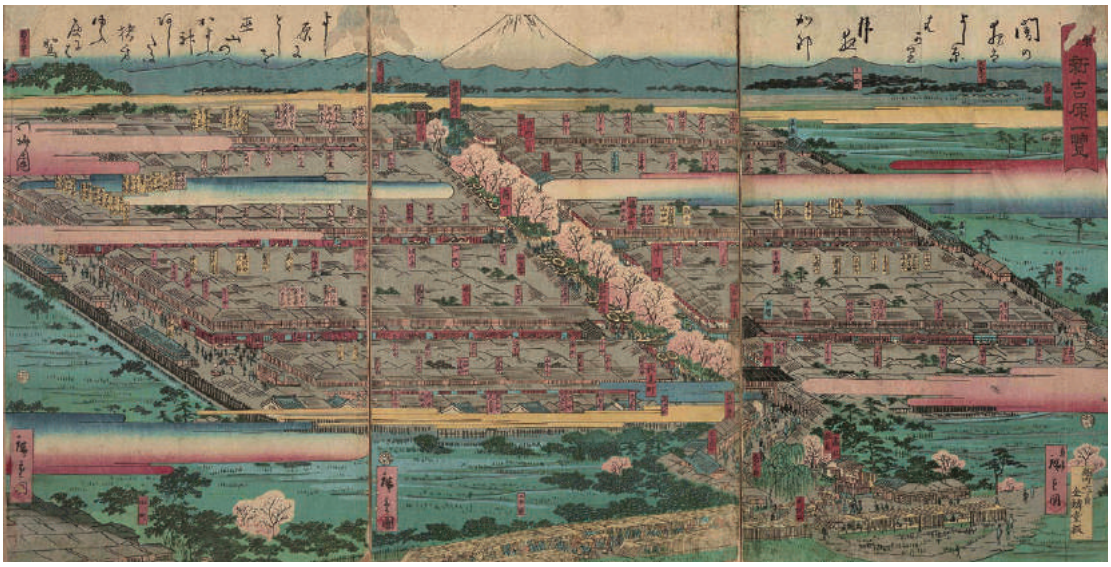
吉原遊郭の状況を大きく変えたのが、1872年(明治5)10月に発令された芸娼妓解放令です。この年に起きたマリア・ルス号事件(注)に関する国際裁判で、日本の芸妓、娼妓が人身売買にあたると指摘を受けた明治政府が、国際世論を考慮して急きょ講じた対策で、人身売買を禁止し、遊女を解放することをうたっています。新政府は、近代国家をつくろうという時期でもあり、役と特権に守られた古い体制を壊したいとの意向も働いたのではないでしょうか。

突然の解放令によって、3000人以上の遊女が一気に解放され、吉原は大混乱に陥りました。しかし、明治政府は、売春自体をなくすつもりなどまったくありませんでした。「遊女とは売春を強いられる者ではなく、自らの意思で性を売る主体である」と定義し直すことで、売春が人身売買ではないという体裁を整えたにすぎなかったのです。結局、吉原を出たほとんどの遊女たちは、〈本人の意思によって〉という建前で再び吉原に売り戻され、売春を続けるしかありませんでした。

ただし、形だけでも主体性を認められたことで、自分の意思をもって行動する遊女はたしかに増えました。「かしく」という遊女は、解放令を機になじみの若者と結婚するから解放してほしいと身元引受人に願い出て拒絶され、じかに役所に嘆願し、はっきりと「かしく、遊女いやだ申候」と訴えた記録が残っています。しかし、東京府はこれを却下。困ったかしくは、今度は深川の髪結いの弟子、菊次郎のもとへ身を寄せ、かしくと菊次郎の連名で再び府に自訴しますが、その後の記録が見つからないため、かしくがどうなったかは残念ながらわかりません。

芸娼妓解放令によって一瞬、希望の光が当たったように見えた遊女たち。しかし皮肉なことに、それまでは性を搾取される存在だった彼女たちは、解放令を境に、自ら性を売る淫らでいかがわしい女として、社会のより裏側へと追い込まれていくのです。

(2017年8月25日取材)



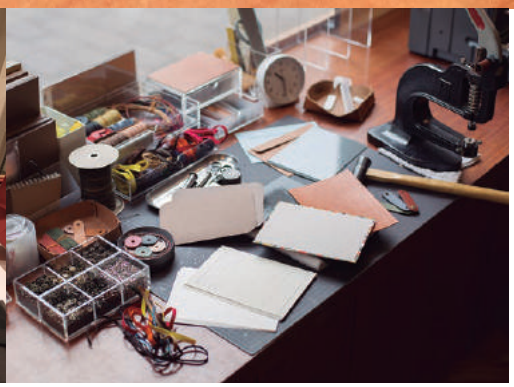

「東都新吉原一覧」
歌川広重(2代)
新吉原遊郭の周囲には「御歯黒溝(おはぐろどぶ)」という堀がめぐらされ、出入り口は大門1カ所のみとして遊女の脱走を防いだ(東京都立中央図書館特別文庫室蔵)

# ゆるやかにつながる「職人のまち」

## 蔵前ものづくり事情

「m+（エムピウ）」の財布類。使い込んで革に艶が出たものも展示

「KONCENT（コンセント）」の生活用品。鮮やかで遊び心のあるものばかり



「カキモリ」のノート。部材はすべて蔵前周辺の職人の手によるもの

かつて隅田川に面して幕府の年貢米を納める「御米蔵（浅草御蔵）」が立ち並んでいた蔵前。御米蔵の裏手には、今は暗渠となった鳥越川が流れ込み、隅田川からの物資が舟で行き来していた。最近、この蔵前周辺が「わさわさ」している。若いクリエイターたちが店を開き、川沿いに飲食店やゲストハウスができて、人が集まっているという。蔵前で何が起きているのか。

### 閑散としていた10年前の蔵前

「今でこそ週末は人が多いですけど、10年前は日曜日なのに誰も歩いてなくてね。コーヒーチェーン店すら日曜日には休むほどでしたから」

そう語るのは、台東区蔵前三丁目に財布やバッグなど皮革製品の工房とショールームを構える株式会社エムピウの村上雄一郎さん。2016年にサンフランシスコの有名店が海外初出店の地として蔵前を選び、話題になったのが嘘のようだ。

村上さんは2006年（平成18）、今の場所に腰を据えた。社名のエムピウとはイタリア語の「エンメピウ（m+）」に由来する。「m」は自身の頭文字、そして「+」は「ものづくりにかかわる人たち」の意味だ。

「職人さん、革屋さん、部品屋さん、そして使い込むお客さんがいて、僕の製品は成り立っています」

蔵前というエリアの特性は「+」の部分、つまりものづくりに必須な技術と素材・部品が「自転車で回れる距離にある」（村上さん）という点だ。それを紐解く前に、蔵前の歴史を少し遡ってみたい。

江戸時代の御米蔵、鳥越川、三味線堀、新堀川の位置関係を示す。浅草橋から隅田川に沿って北北東に進む道が日光道中・奥州街道といわれている
『天保改正御江戸大絵図』高井蘭山 図／1846年［弘化3］（国立国会図書館蔵）。台東区発行『重ね地図で江戸を訪ねる 上野・浅草・隅田川 歴史散歩』などを参考に編集部作成

1908年（明治41）ごろの三味線堀の風景（山本昇雲画／『東京都名所図会・浅草区之部』［台東区立中央図書館蔵］より転載）

## 幕府の米蔵が立ち並ぶ隅田川と街道と寺社のまち

幕府の「御米蔵（おこめぐら）」は、蔵前一、二丁目から柳橋一丁目にかけて広がっていた。創設は1620年（元和6）。米は江戸時代の経済で重要な役割をはたしていたが、御米蔵の大部分は「切米（きりまい）」という知行地をもたない旗本や御家人に与えられるものだった。寛文年間（1661～73）には、この近辺の町人たちが春、夏、冬に支給される切米を受け取って売却を代行する役目を担う。それが「札差（ふださし）」（注1）。蔵前という地名は、この札差が住む一帯を指した言葉だ。

御米蔵には船で天領の米が運び込まれた。当時の運送事情に鑑みると、各地の特産品も積んでいたと考えられる。その御米蔵の裏に流れ込んでいたのが鳥越川（とりこえがわ）で、遡れば秋田藩（久保田藩）佐竹家上屋敷に接する三味線堀（しゃみせんぼり）に至る。三味線堀には船着き場があり、下肥や木材、野菜、砂利などを運ぶ舟が行き来していた。また、鳥越川と合流する新堀川（しんぼりがわ）は、食器具や調理器具などの問屋街「合羽橋（かっぱばし）道具街」の真ん中を流れる江戸時代につくられた堀。大正時代、この両岸に古道具を商う商人たちが店を出し、道具街になったとされる。

蔵前を少し俯瞰すれば、隅田川沿いには日光道中・奥州街道があり、上野には歴代将軍が菩提寺（寛永寺）参拝に利用した下谷御成街道もあった。1657年の明暦の大火後に寺社や武家屋敷が移転してきたため、台東区内には今も300以上の寺社がひしめく。寺社の祭礼には蝋燭などさまざまなものが必要だから、職人が求められたことは想像に難くない。御徒町付近が「ジュエリーのまち」となったのも、仏具や銀器の飾り職人が集まったからだという。浅草寺に参拝する人たちの土産品の需要はあったはずだし、このあたりなら江戸最大の商都・日本橋からさほど遠くない。

隅田川、米蔵、掘割、街道、そして寺社などいくつもの条件が重なって職人が育ち、職人から仕入れたものを小売店に卸す問屋街が形づくられたと考えられるだろう。次に、今、蔵前周辺で活躍するキーパーソンの話を聞いてみよう。

## 知名度が低いのはもったいない
### 「台東デザイナーズビレッジ」

三味線堀は鳥越川を掘り広げてつくられた。そのときの土砂で沼地を埋めてできたといわれる小島町に、ファッションやデザイン関連のインキュベーション施設「台東デザイナーズビレッジ」（デザビレ）がある。自らを「村長」と名乗るインキュベーションマネージャーの鈴木淳さんは「自分で調べたり、人に聞いた話なので断言はできませんが」と前置きして、台東区の産業集積をこう説明した。

「上野駅から御徒町駅の東側には、機械工場や自転車屋がありました。行商の人たちが電車で来て、上野駅で自転車を借りたり買った

**（注1）札差**

名の由来は、蔵米受取手形（札）を藁苞（わらづと）に差す人。代行手数料よりも旗本・御家人に対する高利貸しで巨利を得た。新吉原遊郭で豪遊するなど羽振りがよかった。

りして回ったからだという話です。バイク街も上野駅のそばでしたね。帽子は馬具職人たちが仕事を失い、代わりにつくりはじめたようです。靴やバッグなど皮革製品も多く、戦時中は金属以外の軍の普及品はすべてこのあたりでつくっていたと聞いています」

台東区の調査（注2）によると、製造業は2896事業所、卸売業は4715事業所でこの比率は23区内でも特に高い。興味深いのは、昔から有名ブランドの仕事を請け負っていたにもかかわらず、「どこから引き受けたか言ってはいけない」（鈴木さん）という不文律があったこと。しかし、生産・加工の拠点が海外に移るなか、その美徳は弱みに転じる。台東区の人口は激減し、廃業率も高まった。

危機感を抱いた台東区が2004年（平成16）、旧小島小学校に開いたのがデザビレだ。目的は、創業5年以内のデザイナーを「手づくり作家」から、工場や職人の手を借りてビジネスとして続けられる「経営者のヒナ」に3年間で育て、できれば台東区内で独立させること。そのために作り手の思いをうまく伝えるPRの指導から独立後の人脈につながる工場見学なども行なう。

一方、鈴木さんはこの一帯がこれほどの産業集積地にもかかわらず知名度が低いことをもったいないと思っていた。そこで「地元の人に自分たちの仕事場を見てもらおう」と近所の職人や企業に声をかけ、ワークショップやオープンファクトリーを楽しむまち歩きイベント「モノマチ」（注3）を2011年にスタート。初回の出展者は16組だったが今年は170組。これが人をつなぐ一つのハブとなっている。

台東区に集積するさまざまな産業を大まかに記した。青色部分は、かつて集積していた産業分布。赤色部分は今の産業分布（「台東区産業振興計画（2017年4月更新）」第3章の図表「台東区産業分布マップ」および鈴木淳さん提供資料により編集部作成）

（上）デザビレ入居中のデザイナー、沼本真希さん。アクセサリーブランド「La Coquine」はすでに引き合いが多い
（下）「carmine」のアトリエショップ。卒業生の中村美香さんと沖高麗子（おきこまこ）さんがデザビレの目の前にオープンした

（上）「蔵前は人気がすごくて物件不足。今の卒業生は少し北側に出店しています」と語る台東デザイナーズビレッジの「村長」こと鈴木淳さん
（下）第2回「モノマチ」に集う人々。デザビレそばの佐竹商店街が人であふれた（提供:台東デザイナーズビレッジ）

## 飲み会が縁でオリジナル紙袋を

### 財布とバッグ「エムピウ」

先に登場したエムピウの村上さんは、デザビレの第一期生。もともと建築設計事務所で働いていたが「経年変化するものを自分の手でつくりたくて」イタリアのフィレンツェで修業したあと、2001年に「m+」を立ち上げた。当初は埼玉県新座市に工房を構え、毎月一回この界隈まで買い出しに来ていた。

「一日歩いても『あっ、買い忘れた！』ということがしょっちゅうでした。逆になかなか来られないから『買っとこうかな』と必要ないものまで購入して後悔したり」と笑う。

そんな村上さんは2004年にデザビレに入居して、このエリアの利便性を再認識する。「必要なも

**（注3）モノマチ**

「台東モノづくりのマチづくり協会」が仕掛けるイベント。第9回は2017年5月26～28日、店舗、メーカー、問屋、職人工房など約170組が参加して開催された。

**（注2）台東区の調査**

総務省「経済センサス」（平成26年）による。卸売業と小売業は分けて算出している。

今回の取材先、撮影場所など関連ポイント。青色部分はかつて幕府の御米蔵があったエリア（台東区発行『重ね地図で江戸を訪ねる 上野・浅草・隅田川 歴史散歩』などを参考に編集部作成）

のはそろいますし、自転車で回れば用事が済む。便利だなーと」。蔵前でいい物件と出合い、卒業後に工房を開く。

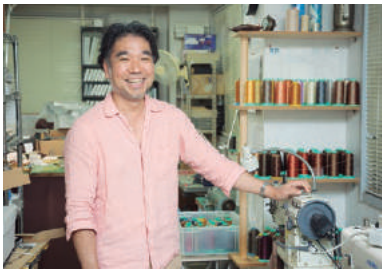
自分一人で事業を始めるとなるとわからないことばかりだ。商標登録はどうやるのか、こんな金具をつくれる人はいないか……。そんなとき頼りになるのは人のネットワーク。同期生や鈴木村長はもちろん、モノマチの打ち合わせで顔を合わせた「ご近所さん」にも助けられた。

「モノマチは月イチで会議があり、終わると飲みに行くのですが、たまたま隣に座ったのが紙袋をつくっている職人さん。それまで既製品を使っていたので、『僕のもつくってください！』とお願いして、オリジナルの紙袋をつくってもらいました。そういう縁からいろいろな人とつながりましたね」

ものづくりの現場では、ロットが小さかったり、よく知らない相手だと取引しづらい傾向がある。でも台東区の事業である「デザビレ」の出身で、かつモノマチという同じ目的で集まる仲間ならばその壁は低くなる。

気さくな人柄の村上さんは、今ではすっかりこの近辺の兄貴分だ。「オッサンだからね」と謙遜するが、SNSのグループで相談を受けたり、逆に若手に教えてもらったり。隅田川を越えた墨田区のデザイナーたちともつながっていて、卓球大会を開くことも。都会とは思えない濃密な人間関係が蔵前にはある。

（上）「カキモリ」をゼロからつくり上げた広瀬琢磨さんは、外資系医療機器メーカーからの転身組。新鮮な目で文房具の可能性を探る
（下）試し書きができる万年筆やボールペン。価格は1000円から3万円くらいまで。書き味、使い心地などのコメントも添えられている



（上）イタリアのフィレンツェで2年ほど修業したあと「m+（エムピウ）」を立ち上げた村上雄一郎さん。この近辺の兄貴的存在だ
（下）ナイフで型紙に沿って革を切り出していく村上さんの手

## うちが繁盛すれば職人さんも潤うから
### ノートとペン「カキモリ」

エムピウから歩いて数分。蔵前四丁目の築50年のビルに、オーダーメイドのノートや試し書きができる万年筆、オリジナル色のインクなどをそろえた文具店がある。2010年にオープンした「カキモリ」だ。株式会社ほたかの広瀬琢磨さんが立ち上げた。親会社は広瀬さんの祖父が文具店から興して今はオフィス家具まで総合的に扱うが、文房具は通販業者に押されて旗色が悪い。

広瀬さんは、文具店ならではの専門性がカギになると考えた。

「『書く』という行為は残るはずです。ならばペンや紙など、奥深い知識が必要な分野に特化すれば勝負できると思いました」

広瀬さんは、小売店を小資本で開くために家賃の安い東京の東エリアに狙いを定め、浅草や合羽橋を行き来していて蔵前を「発見」する。「人は歩いていないけど、目的買いのお客さまを想定していましたし、当時は空き家だらけで安

かったから」と笑う広瀬さんは、蔵前を調べるうちに思いがけないことを知る。

「文房具に関する地場産業があったのです。かつて隅田川は紙を運ぶルートで、ここで加工したものを日本橋界隈に売っていた。だから加工所や印刷所、問屋があるようです」

カキモリの「たのしく、書く人。」というコンセプトを表すのがオーダーメイドのノートだ。実は、ノートの表紙や用紙、留め具、ゴム紐などの部材すべてを、歩ける距離にある職人や企業につくってもらっている。抜きや貼りが必要な封筒もだ。仕上がった部材は自分たちで引き取りに行く。小ロットで対応してくれる産業の集積があればこそである。ただし、職人は高齢化が進み、後継者問題もある。広瀬さんは「カキモリが繁盛すれば職人さんも潤うから」とすぐそばに今の3倍の面積の店舗を確保し、移転を計画中だ。

現在20社ほどに協力を仰いでいるが、当初はつてがない。突破口となったのは顔の広いエムピウの村上さん。職人を紹介してもらい、人づてに広がっていった。「モノマチ」に初回から参加したことも、地域につながる追い風となった。

「ここで驚くのは、人のつながりをとても大事にしていること。一度つながったらずっと面倒をみてくれます、職人さんも個々のお店もです。東京では失われたと思っていたものが、ここには残っているんです」

## 頼り合わないからおもしろい

### デザインプロダクト「KONCENT」

カキモリから南へ200mほど行くと、「蔵前二丁目」の交差点に出る。その向かい側に「KONCENT蔵前本店」がある。2002年に「デザインとものづくりを通して世の中を元気にすること」を目指して創業したアッシュコンセプトの直営店で、2012年4月にオープンした。

色鮮やかな生活用品が並ぶが、よく見ると一風変わった商品ばかり。代表作の一つが、お湯を注いだカップ麺のフタを一生懸命押さえる姿がユーモラスな「+d Cup men（カップメン）」。時間が経つと色が変わる。そんな遊び心のあるデザイナーの製品を見出し生活者に届けている。

代表取締役の名児耶秀美（なごやひでよし）さんは、隅田川対岸の墨田区で生まれ、浅草寺の前の幼稚園に通っていた。駒形で創業して以来、ずっとこの近辺にいる。

「どうして蔵前かって？ デザイン関係は山の手に拠点を置く人が多いけれど、私には人工的なまちという気がするんです。その点、ここは昔から人が住んでいて、蕎麦屋とか豆腐屋とか古くていいものがちゃんと残っている。私も未だに新しい発見をするんですよ」

KONCENTの店舗は玩具の卸企業が40年前に建てた倉庫だ。名児耶さんは「浅草橋までが浅草寺の参道のように描かれている昔の地図があります。だからここには玩具屋さんが多いんでしょうね」と言う。

直営店を出す気になったのは、エムピウの村上さんやカキモリの広瀬さんといった若い世代が「わさわさしはじめたと聞いた」（名児耶さん）から。「おもしろい！ 私もまちの活性化のためにショップを出そう」と物件を探した。鈴木村長、村上さん、広瀬さんなどみんなと仲がいい。理由を問うと「なんだろうね。都会なのに不思議とつながるんだよね」と考えたあと、こう言葉を継いだ。

「それぞれが力のある人たちで、頼り合っていないから、かな。志をもっているおもしろい人たちとは、つながりたいと思いますからね」

「KONCENT」の店内。玩具卸会社の倉庫を、壁だけ白く塗ってほぼ原型のまま使っている。両サイドのキャットウォークは名児耶さんのお気に入り

自分で組み立てられる小さなロボット「FACTORY ROBO」。KONCENTにはこうした遊び心のある製品が並ぶ

隅田川テラスを毎朝走るアッシュコンセプトの名児耶秀美さん。「グラフィックは空間があるとバランスよく組める。隅田川の空間も人間にバランスをもたらすものだね」と水辺の魅力を語る

（上）シエロ イ リオの店長で株式会社バルニバービウィルワークスの取締役も務める吉田浩介さん
（右）隅田川のロケーションを活かし、築40年のビルをリノベーションしたカフェレストラン「Ciero y Rio（シエロ イ リオ）」。2011年オープン

## 濃密なのに閉じていない蔵前の「人と人」の関係

おもしろい人が集まるまち。その魅力をさらに高めるのは個性的な飲食スペースだ。蔵前の隅田川沿いにそうした店が2軒ある。2011年にオープンした「Cielo y Rio」（シエロ イ リオ）と、翌年にできたゲストハウス「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」（Nui.）。いずれも倉庫を改修し、隅田川というロケーションを意識したつくりである。

シエロ イ リオの店長を務める吉田浩介さんによると、このビルはかつて楽器店の倉庫。「川側にはシャッターしかなかったので、窓をつけました。隅田川が見える窓際の席から予約が入っていきます」と話す。

Nui.をはじめ、ゲストハウスを4カ所で手がけるBackpackers' JapanのCFO、桐村琢也さんは、「天井の高さと開放感、そして川沿いが決め手でした」と振り返る。2階から上階が客室で、1階は誰でも利用できるカフェ&バーラウンジだ。

今回お話を聞いた鈴木村長、村上さん、広瀬さん、名児耶さんは、この2店をよく訪れる。村上さんが卓球大会を開いたのはシエロ イ リオの上階の卓球バー「リバヨン」だ。Nui.でモノマチの打ち上げがあるときは「大勢いらっしゃるので、失礼がないようにスタッフの陣容を厚くします」と桐村さんは笑う。

蔵前で起きていること。それは隅田川に端を発する分厚い歴史のうえに、今を生きる人たちがゆるやかにつながりつつ互いに触発し合ったことが花開いたのだと思う。なぜ人と人がつながるのか明快な答えはないが、一人では完結しない分業制のものづくりをしてきた旧住民の面倒見のよさ、よそ者を排除しない懐の深さが地域の土壌としてある。その恩を受けた人たちが、次の世代にも同じように接することで、蔵前の地域性は連綿と受け継がれていくのだろう。

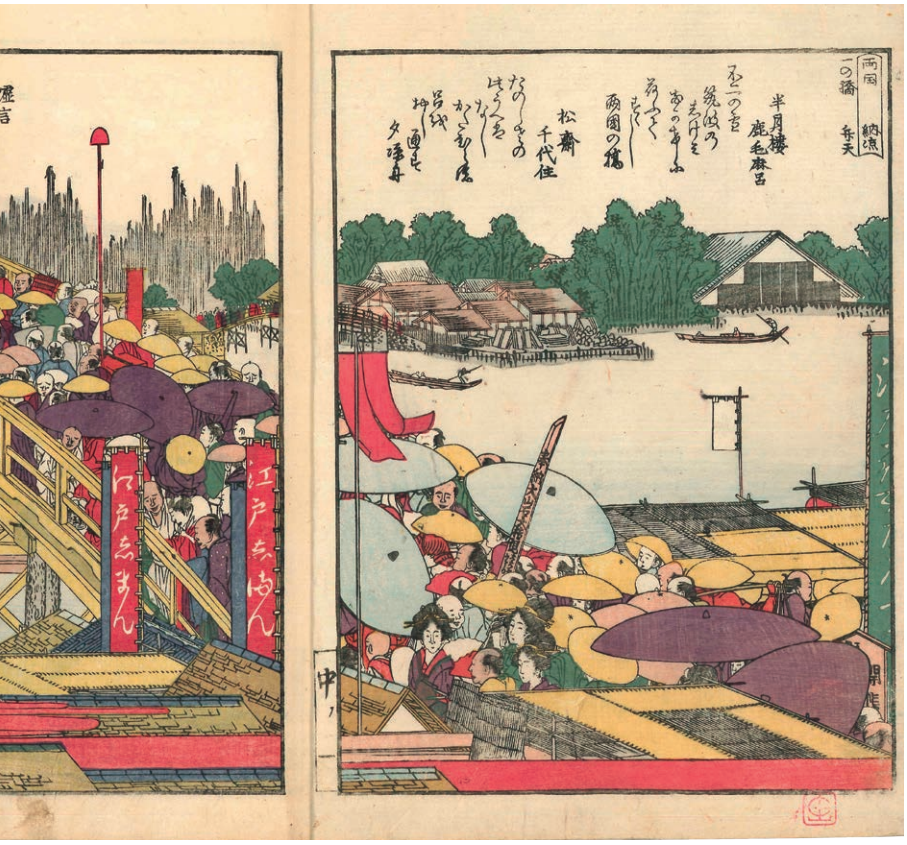
（2017年8月3、4、12、16、17日取材）

（上）玩具店の倉庫だったビルを再生したゲストハウス「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」。1階のラウンジスペースは誰でも利用できる。2012年オープン
（右）Nui. HOSTEL & BAR LOUNGEのマネージャーを務め、Backpackers' JapanのCFOでもある桐村琢也さん

# 化政文化を生んだ武士と町人の交流 ——本所割下水と葛飾北斎

「明暦の大火」(1657年[明暦3])をきっかけに、隅田川左岸の湿地帯を開拓するためにつくられた掘割の一つに本所割下水(ほんじょわりげすい)がある。これは、建築資材を舟で運び込む「運搬路」でもあった。このそばで生まれたのが浮世絵師の葛飾北斎だ。北斎が生涯離れなかった本所界隈は、士農工商の身分を超えた文化の発信地だった。すみだ北斎美術館学芸員の五味和之さんに、本所割下水と北斎についてお聞きした。

隅田川右岸から上流の両国橋を望む。北斎は生涯のほとんどを左岸の墨田区内で過ごした



『絵本隅田川両岸一覧』(両国)
北斎の狂歌絵本の代表作。両国橋の両側には火除地として広小路が設けられ、上野、浅草と並ぶ江戸の盛り場として賑わった(すみだ北斎美術館蔵)

インタビュー
## 五味和之さん
すみだ北斎美術館 学芸員
(教育普及担当)

**Kazuyuki Gomi**
1958年生まれ。大正大学文学部卒業、同大学院文学研究科修士課程修了。墨田区文化財保護指導員や文化センター講師を経て2009年から現職(墨田区文化振興財団職員)。2016年、美術館開館と同時に教育・普及を担当。

本所深川町屋絵図(旧幕府引継書)
本所割下水の位置を記す。南側が今の北斎通りで、北側は春日通りにあたる(国立国会図書館蔵)

1910年（明治43）（右）と関東大震災以前（左）の本所割下水（南割下水）。下水と名づけられているものの水はきれいで、飲み水（上水）以外の生活水として使われていたという（墨田区立ひきふね図書館蔵）

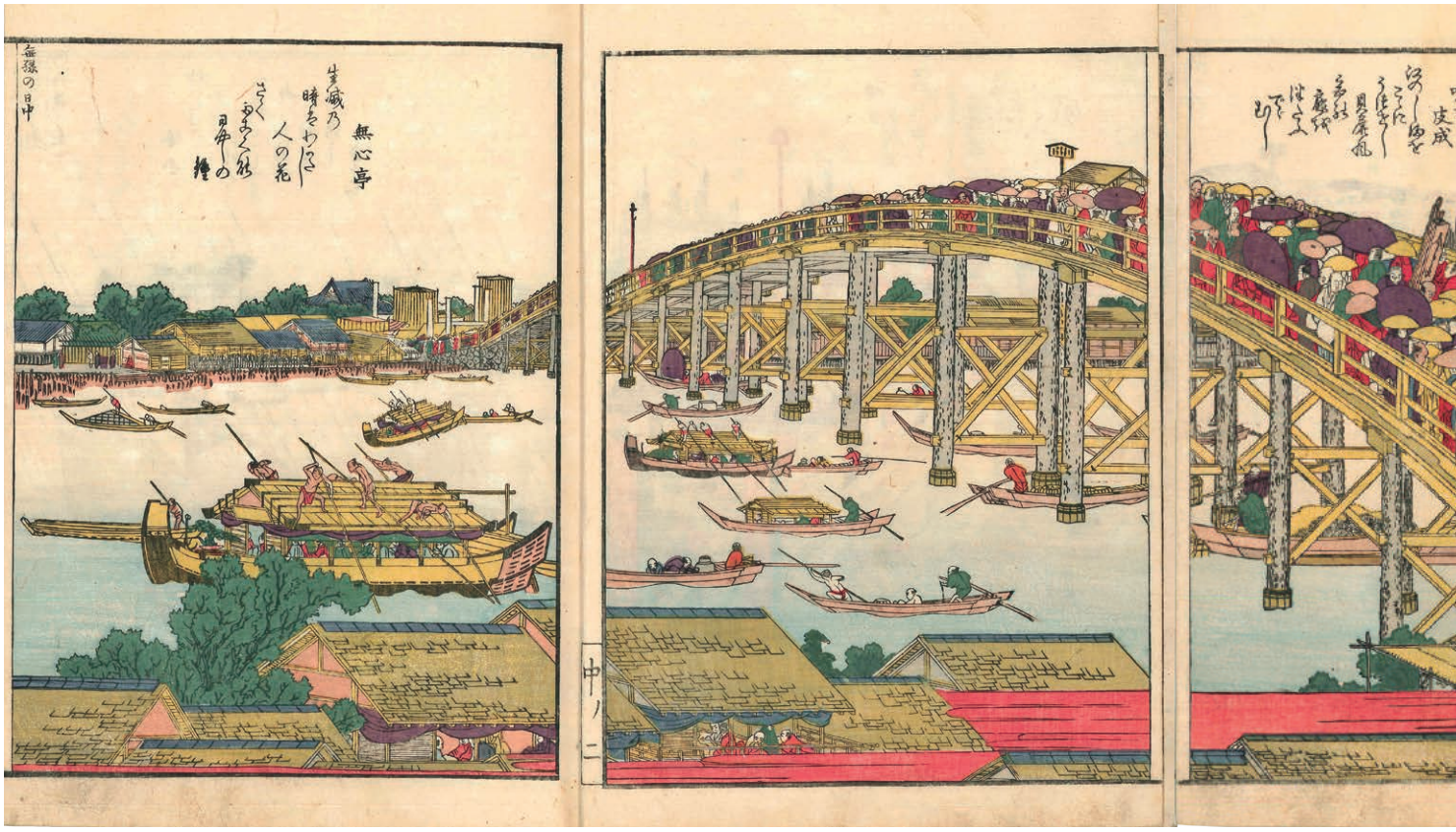
本所割下水（南割下水）は昭和初期に暗渠となり、1994年（平成6）から「北斎通り」と命名された。本所七不思議の舞台の一つとしても知られる

## 防災都市として開発された本所

北十間川（きたじゅっけん）をはさみ北部の向島区と南部の本所区が1947年（昭和22）に統合して誕生したのが墨田区です。江戸時代初期まで、南側はわずかな干潟に人家が点在する荒れた湿地帯でした。

本所地域が開発されたのは明暦の大火以降。焼け出された人々の移転先として、10万人余りの遺骨を葬る場所として、さらには防災都市計画として、幕府は本所地域を開拓整備し、新たなまちなみを形成しました。それまでの江戸市中は江戸城を中心に旗本屋敷を「の」の字に配置する軍事要塞的なまちづくりでしたが、明暦のころともなれば幕政は安定し外敵の脅威も薄れていたので、防災上の観点からもっとも機能的な碁盤目状に区画整理したのです。

両国橋を架け、市中に防火堤や火除け地を設け、竪（たて）川、大横川、北十間川、横十間川などを縦横に開削しました。これらの運河は今も残りますが、暗渠（あんきょ）となった用水路に「割下水」と呼ばれたものがあります。道路を割って掘削し、建築資材を運ぶ舟が通ったり、排水路として使われていました。割



下水は2本あって、現在の北斎通りが「南割下水」、春日通りが「北割下水」で、東西に貫通していたのです。たんに「割下水」というと南割下水近辺を指し、北斎通りの名は浮世絵師・葛飾北斎の生地だったことによります。

隅田川を両国橋で渡った割下水周辺の本所地域こそ、後の文化文政期（1804～1830）を最盛期とする江戸町人文化「化政文化」（注1）のダイナミズムを生む淵源となりました。そのきっかけは、五代将軍綱吉（1646～1709）の時代に実施されたまちなみの再整備です。

## 江戸の文化を育んだ「身分を超えたつながり」

本所の再整備は、原因は津波など諸説ありますが、地上90㎝に達する大水が出たためです。幕府は本所の土地をいったん公収し、武士は元の屋敷に戻らせ、町人にも補償金を出して西側に移転させました。この都市計画の練り直しの時期に代替わりした将軍が綱吉です。初の徳川直系ではない政権なので力ずくで抑えようとする軍事的な色彩が強く、武士のためのまちづくりへと仕切り直します。碁盤目状のまちなみは残したのですが、より細かく区割りし、道も狭くして、旗本・御家人地を多く設け、与力・同心の組屋敷や、雑兵・足軽の官舎も置きました。ゆったりした防災都市から、武士の比率が高い軍事都市へと若干の修正が図られたわけです。この町割は現在も変わりません。

こうしたまちづくりは武士と町人の交流をもたらし、新たな文化を生みました。旗本・御家人などの下級武士は3日に1回くらいしか仕事がなく、下手をすると裃を質に入れるほど生活に困窮しています。一方で町人は、そこそこカネはあるものの暇つぶしの娯楽に飢えている。カネのない暇人とカネのある暇人が隣り同士になることもありました。すると「お武家さん、あんた読み書きできて漢籍も古典も知ってるなら、おもしろい話を書いてくれないか、カネは出すから」という話になるわけです。

武士にすれば、例えば高屋彦四郎の本名ではまずいから柳亭種彦というペンネームで作品を出す。それが当たって、次から次へと作品を書き、どんどん芝居小屋にかかる。しまいには作家をとるか武士をとるか幕府に迫られ筆を折った山東京伝のような人気戯作者も出るわけです。

そうした素養ある下級武士が多く住んでいたのが本所地域でした。町人も商人も武士も農民も渾然一体となっていた本所のような地域は江戸じゅう探してもそうそうなかったでしょう。文化は混沌のなかから生まれます。戯作や浮世絵など江戸文化が爆発する導火線にいつ火が着いてもおかしくない場所だったのです。

## 本所割下水に生まれ93回引っ越した絵師

そんな江戸文化を代表する浮世絵師の一人が葛飾北斎（注2）です。本所割下水で生まれた北斎の父親は川村氏としかわからず、武士か町人かはっきりしません。母方の先祖は赤穂浪士に討ち取られた吉良上野介の家臣、小林平八郎とされています。

幕府の御用鏡師である中島伊勢の養子になり、6歳から絵を描くことが好きで、19歳で版木彫りの仕事を辞め、浮世絵師の勝川春章に弟子入りしました。

当時としては異例の90歳という長寿を全うした北斎は、最晩年に至るまで旺盛な創作活動を続け、多種多彩な画業を残しましたが、実に生涯93回にわたる「引っ越し魔」だったことでも知られています。敷金・礼金もなければ鍋釜さえ損料屋（今のレンタル店）から借りられた時代なので、気軽に身一つでたびたび引っ越すことも可能でした。

なぜ北斎はそんなに住まいを変えたのでしょうか。カネ遣いの荒い孫から逃げていた、掃除嫌いで家が汚れるたびに取り替えた、先輩の仏教学者が願掛けで百度転居したのに倣った……など諸説ありますが、いずれもあまりよい話ではないので、墨田区としては「創作のインスピレーションを得るため頻繁に環境を変えた」と説明するようにしています。

浮世絵は薄利多売ですから版元

『北斎仮宅之図』
北斎の弟子が描いた晩年の北斎と三女・応為（おうい）。衣食などに無頓着で、散らかった部屋で作画三昧だったことが窺える（国立国会図書館蔵）

**（注1）化政文化**
文化・文政（ぶんかぶんせい）（1804～1830）ころの江戸中心の町人文化。人情本や俳諧、川柳などが流行し、浄瑠璃や歌舞伎、浮世絵も盛んだった。

は儲かりますが絵師は潤いません。殿様や豪商の仲間内で配る会員限定の豪華絢爛で高価な摺絵や枕絵（春画）で絵師は生計を立てていました。

北斎も例外ではありません。実は1999年（平成11）にアメリカの『ライフ』誌が「この千年に偉大な業績を残した百人」として北斎を讃えるまで、日本では「技巧を凝らした枕絵師」との偏見的なイメージが根強く、嫌う人も多かったのです。

## マルチな才人が生涯追った画題「水」

独自の遠近法や想像力を駆使した鳥瞰図など技巧に優れていたのみならず、北斎は多方面に才能を発揮しました。

風景はもちろん人物も得意で読本の挿絵も描き、煙管や櫛のデザインもすれば、絵画の技法を手ほどきする教育者でもあり、巨大な箒（ほうき）に墨汁を付けて達磨を描いたかと思えば米粒に雀を描くなど、時にはパフォーマーでもあったのです。これほど幅広く活躍した浮世絵師はほかにいません。一つ所に留まらず好奇心の赴くまま挑戦を続け、90歳で世を去る直前まで絵筆を離さず「あと5年、天が命を与えてくれればほんとうの絵師になれるのに」と語ったと伝えられています。そうであれば「インスピレーションを得るために引っ越しを繰り返した」という墨田区の「公式見解」も、あながち的外れではないでしょう。

そんな北斎が、これだけは一貫して追究した画題、それが「水」にほかなりません。形のない水をどう捉え、海、波、川、滝をいかに描くか。40代半ばで描いた『賀奈川沖本杢乃図』と70代で描いた『冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏』を比べると、波の表現の巧拙は一目瞭然。今にも水しぶきがかかるような後者の迫力は、まるで3D映像のようです。

93回の引っ越しでは小石川や浅草にも行きましたが、すぐに隅田川沿岸に戻っています。隅田川もよく描きました。富士山を望む悠揚たる川の流れと、その周辺に生きる人々の活気。それこそ北斎が生涯変わらず魅了されたものだったのでしょう。

（2017年8月1日取材）

（上）『賀奈川沖本杢乃図』
文化前期（1804〜09）に描かれた洋風版画。のちの『冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏』に連なる構図だ

（中）『冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏』
1831年（天保2）ごろに描かれた。『賀奈川沖本杢乃図』と比べると波の表現が進化していることがわかる

（下）『冨嶽三十六景　御厩川岸より両国橋夕陽見』
御厩川岸は今の厩橋付近。両国橋が下流にあり、その向こうには富士山が描かれている
（3点とも、すみだ北斎美術館蔵）

**（注2）葛飾北斎**

江戸後期の浮世絵師（1760〜1849）。江戸本所割下水の川村家に生まれる。春朗・宗理・画狂人などたびたび号を変えた。勝川春章の門で浮世絵を、また狩野派・土佐派・西洋画などからも画技を学ぶ。マネ、モネらフランス印象派の画家に大きな影響を与えた。代表作に『冨嶽三十六景』『北斎漫画』など。

# 江戸の掘割と現代のカフェ

## 深川今昔まち歩き

木場公園そばの仙台堀川北岸にある「cafe copain」の店内。板壁の下のコンクリートは、かつての堤防護岸だ

**慶長年間（1596-1615）、摂津国から来た深川八郎右衛門によって隅田川河口が埋め立てられ、「深川村」と命名されたことに始まる深川は、1657年（明暦3）の「明暦の大火」から急速に発展。日本橋や神田にあった貯木場が深川、そしてさらに東の木場へと移り、また社寺の移転も相次いだ。今、この深川の「運河」「材木倉庫」「寺町」という地域の資産がカフェを呼び込むなど、思いがけず新たな賑わいを生んでいる。中川船番所資料館の久染健夫さんの案内で、深川エリアを巡った。**

深川案内人
久染健夫さん

**Takeo Hisazome**
江東区中川船番所資料館
1956年（昭和31）東京都江東区生まれ。中川船番所資料館や深川江戸資料館で学芸員として勤務。館内の案内だけでなく、江東区のまち歩きイベントの講師も務める。『江東区の民俗（深川編）』の執筆にも携わった。

番所橋から西に向かって望む小名木川の風景

本所深川町屋絵図（旧幕府引継書）
中川番所と小名木川の位置関係を記す。幕末の史料と思われるが、江東区域の大きな掘割は今もかなり残っていることがわかる（国立国会図書館蔵）

## 関東一円の水系と江戸市中を結ぶ川

水しぶきを上げてバスが川の中へダイブした。東京スカイツリー®出発の水陸両用観光バス「スカイダック」が飛び込むのは、旧中川が荒川ロックゲートに注ぐ南端付近。ここから西へ延びている一本の川がある。東端の番所橋に立って西側を眺めると一直線に見通せるので、人工運河とわかる。両岸には遊歩道。水面の近くを気持ちよく散歩できそうだ。

旧中川と隅田川を東西に結ぶこの小名木川（おなぎがわ）こそ「利根川など関東一円の水系と江戸市中の水路を結んでいた物資運搬の玄関口」と話すのは、江戸時代に船番所が位置していた小名木川東端近くにある中川船番所資料館の久染健夫さん。徳川家康が行徳産の塩をはじめ、さまざまな物資を運ぶため江戸に入府して最初に開削した運河が小名木川だという。縦横に水路が走る「水のまち」江戸の開幕を告げた運河が、420年の時を超えて埋め立てられず残っているのは感慨深い。

家康は江戸湾に注いでいた利根川を銚子河口へ至る流路に付け替えるなど、関東一円の水運網を整備した。これにより、危険を伴う海運やところどころ陸路を使っていた東北諸藩から江戸への廻米が、河川を通じてスムーズに運搬できるようになった。日本橋界隈から隅田川、小名木川、船堀川（現・新川）を経て江戸川、利根川水系へとつながる舟運の公式ルートが定められた。

小名木川の北岸には、摂津国出身の深川八郎右衛門らによって拓（ひら）かれた深川村が発展。南岸には、東北・関東方面から大船で来た荷物を小船に小分けして江戸市中に届ける人たちが多く住み、船大工も目立ったことから海辺大工町と呼ばれた。

江東区深川地域が水運流通の結節点として栄えた痕跡を、久染さんの案内でたどってみる。

## 貸蔵が掘割沿いに建ち並んだ「蔵のまち」

小名木川の河口に架かる万年橋❶（P・31の地図参照）を南下し、清澄公園西端を左に見て進めば、清川橋で仙台堀川を渡る。ここから南西方向に下るのが大島川西支川（にししせん）。その運河に沿って右に折れると小さな「中の堀公園」が現れた❷。

「この佐賀町（注）あたりが『蔵のまち深川』の中心地でした」と久染さんが江戸古地図を示す。今も残る仙台堀川、大島川西支川のほかにも掘割が複雑に入り組んでいた。水運流通の拠点だったということはつまり、荷揚げされた物資を保管する蔵も多かったのである。

「深川の蔵の特徴は『貸蔵』です。特に三井家が点在する土地を多くもち、貸蔵経営をしていました。深川でひと旗上げようと商いを始める人が借りたり、商品が大量に入荷したとき臨時に借りるなど、便利に活用されていたようです」と久染さん。

公園奥のフェンスの向こう、会社ビルにはさまれて、まだ水路が残されていた。古地図を見ると、

佐賀稲荷神社の境内にある力石（右）と天水桶（左）

**（注）佐賀町**
江戸時代は深川佐賀町と呼ばれていた。現在の佐賀一丁目と佐賀二丁目にあたる。

『江戸の花 深川之夕暮』歌川国芳画
辰巳芸者はきっぷのよさと江戸前の粋（いき）が売り物だった（提供:江東区教育委員会）

深川江戸資料館に展示されている井戸の模型。飲料には適さず「水売り」に頼っていたと考えられる（提供:公益財団法人江東区文化コミュニティ財団）

富岡八幡宮境内にある「永昌五社稲荷」。肥料業界の企業・団体は今も参拝を欠かさないという

まさにここが隅田川からクランク状に続くかつての「中之堀」だ。水路はL字を描き大島川西支川に今もつながる。久染さんの「川筋を屈曲させたのは、長さをとって蔵を多く建てるため」という説明に納得する。

近辺には三井倉庫や日立物流などの建物があり、「蔵のまち」の面影をわずかに留めているが、その痕跡が明らかなのは佐賀稲荷神社にある力石と天水桶だ。蔵で物資を運ぶ仕事の余技から生まれた、米俵や酒樽を持ち上げる力比べの民俗芸能「深川の力持」。力石はこの技芸をもつ人たちが寄進した。

## 飲料水と炊事は「水売り」頼り

天水桶は1886年（明治19）、佐賀町に米の取引市場が開設された際、仲買商たちの寄進で設置された。明治時代の佐賀町には米穀問屋が集積していた。

昭和初期竣工の深川正米市場の建物は「食糧ビル」としてアートギャラリーなどに活用されていたが2002年（平成14）に解体され集合住宅に。エントランスのアーチ型オブジェが往時の建物の外壁イメージをかすかに残す。

沿岸に油問屋があった油堀は埋め立てられ、今は首都高が走る。この油堀周辺の長屋という設定で、深川江戸資料館に佐賀町のまちなみが再現されている。長屋の玄関で目を引くのは大きな水甕。埋め立て地のため井戸を掘っても塩水しか出ないので、飲料と煮炊きの水は「水売り」に頼っていた。久染さんによれば「日本橋より西側にあった銭瓶橋（ぜにがめばし）の下に玉川上水と神田上水の用水が流れ落ち、それを水桶に受けて船で隅田川を越え、売り歩いていた」らしい。

隅田川沿岸、佐賀町付近の掘割は、もともと材木置場として幕府が寛永年間（1624～44）に開削したもの。日本橋や神田の材木問屋に高積みされていた材木が火災の延焼の原因になることから、開拓途上の隅田川沿岸に移したのだ。

久染さんは「掘割に浮かべておけば海水なので材木に虫がつきにくく舟運にも都合がよい。佐賀町近辺が『蔵のまち』として流通の拠点となるにつれ、より東方の入江である木場へ貯木場は移りました」と話す。

## 今に続く門前町と寺町のたたずまい

佐賀町から永代通りを門前仲町方面へ歩けば富岡八幡宮❸。1627年（寛永4）に社殿が完成し、周辺は門前町として発展した。料理茶屋が賑わい花街も生まれる。江戸城の東南（辰巳）に位置する深川の辰巳芸者は、きっぷのよさが身上だった。男物の羽織をひっかけて宴席に出たりしたので、羽織芸者とも呼ばれた。

「木場などの旦那衆が客筋で荒っぽい人も多いので、なよなよして舐められちゃいけない、みたいなこともあったんでしょう」と久染さん。今も門前仲町は、飲食街としても住宅地としても人気エリアになっている。

八幡宮内の小さな永昌（えいしょう）五社稲荷は干鰯（ほしか）の仲買商が信仰していた。銚子や九十九里浜産の干した鰯は、藍や木綿など高付加価値の作物の肥料として取引された。「深川の大店の主要取り扱い商品は米、材木、干鰯」（久染さん）だったというわけだ。

再び北上して仙台堀川を越え、清澄庭園の東側へ。ここには寺町が広がる。なかでも多くの子院や塔頭をもっていたのが浄土宗の霊巌寺（れいがんじ）❹。もとは霊巌島（中央区新川）にあったが、1657年の明暦の大火で被災し現在地に移った。霊巌寺には僧侶の宿泊する学寮もあり「修行中の若いお坊さんが何

今回訪ね歩いた小名木川以南と横十間川以西のポイント。赤い部分はかつての蔵のまち。番号は記事に登場する順番を表す

千人も一挙にやって来たのだから、まちも大きく変わるわけですよね」と久染さん。

霊巌寺前の深川資料館通りには多彩な店舗が軒を連ね、清澄庭園を訪れた人々の散策路となっている。

## 運河沿いの倉庫がコーヒーショップに

この清澄白河付近で近年増えているのが、煎り立ての豆をハンドドリップで一杯ずつ丁寧に淹れるコーヒー店。米国発の新潮流「サードウェーブコーヒー」の総称で知られるが、そもそも日本では昔懐かしい「マスター」のいる個人営業の喫茶店がそのスタイルなのでむしろなじみ深い。

先駆けてこの地に出店（2012年4月）したのが、「The Cream of The Crop Coffee（ザ クリーム オブ ザ クロップ コーヒー）」❺。木場公園北端の東京都現代美術館に近く、裏手には大横川が流れる。天井の高い建物はかつての材木倉庫。煙突の要る大きな焙煎機を備えるのにふさわしい。庭園や美術館が最寄りの清澄白河にサードウェーブコーヒー店が集まりだしたのは、このような利用しやすい物件が多いからでもある。

カカオ豆の仕入れから精錬まで自ら手がけるベルギーのチョコレートの輸入販売で知られ、同様に生産者の顔が見える飲食事業として自家焙煎コーヒーに参入したのが株式会社 THE CREAM OF THE CROP AND COMPANY。取締役の寺岡宏さんは「川沿いであることもこの場所を選んだ理由の一つ」と言う。

「直火ではなく熱風式の焙煎機なので、煙というよりも湯気に近い排気ですから周囲の環境に影響は出ません。しかし住宅街だとやはり滞留しがち。でもここならば常に風が吹いている川側に排気口を出せます」

あくまで「テイクアウトもできるロースター」という位置づけの店だから、席は最小限しかない。焙煎したコーヒー豆は他店へ回すほか卸・小売も。週末は美術館の行き帰りに立ち寄る客が多く、平日は近隣の人たちに重宝されている。

「朝夕の出勤時と退勤時にいつも寄ってくださるお客さんがいたり、近くの会社の方々ともざっくばらんにおつきあいさせていただいて

「The Cream of The Crop Coffee」の内部。天井が高いので大型の焙煎機が据え付けられるうえ、裏が大横川なので排気もこもらない

コーヒー事業部門を統括する取締役の寺岡宏さん

います。この近辺にはやはり下町ふうの気さくな独特の雰囲気がありますね」と寺岡さんは話す。

かつて材木を貯蔵し運び出した運河沿いの倉庫が、はるか時を経て自家焙煎コーヒー店として再利用されている。ドリップコーヒーで一息つき「こんな活かし方があるんですねえ」と久染さんも感心していた。

## 材木 いなせな川並の技芸を伝承する木場の角乗

仙台堀川を挟んで端から端まで歩くと南北約1kmの木場公園❻。ここは江戸から昭和末期にかけて材木問屋が集積し貯木場があったところ。海に面した碁盤目状の掘割に材木が浮かんでいた。久染さんによれば、江戸時代、広義に「木場」と呼ばれた地域は現在の木場、平野、三好、冬木あたりという。3年に一度の富岡八幡宮例大祭を翌日に控え、深川のまちは祭りの準備に浮き立つ。木場の北から南へかけての昔の通称、「上木場」「中木場」「下木場」の幟（のぼり）が道路沿いにはためいている。

かつての材木商いが垣間見える話を久染さんがしてくれた。

「材木の需要は建築に限りません。例えば注文された獅子頭をつくるのに端柄（はがら）材が欲しい職人さんもいます。そんな細かい要望にこたえる商店が生まれ、木工品を手がける職人さんも周囲に居を構えました。まとまった分量でなくても売ってくれたのが木場のいいところ。中野や杉並あたりからも買いに来たようです」

かつて木場の筏（いかだ）師を「川並（かわなみ）」と言った。川に並んで材木の仕事をする様を三代将軍家光が見てこう呼んだことが由来と伝えられている。川並は全国から集められた材木を選別、仕分けして貯木場で管理し、寸法を取って値踏みし、筏に組んで運搬する材木問屋の花形職業だった。水に浮かべた材木を鳶口一つで乗りこなし筏に組む仕事の余技から生まれた民俗芸能が「木場の角乗（かくのり）」で、「深川の力持」と同じく東京都指定無形民俗文化財。毎年10月の江東区民まつりでは木場公園の池で保存会の人たちが下駄や梯子を使った妙技を披露し、拍手喝采を浴びている。「角材を使うので丸太乗りより難しいのですが、保存会には子どもたちも参加しています」と久染さんは言う。

## 開発 新旧住民の融和はスムーズに

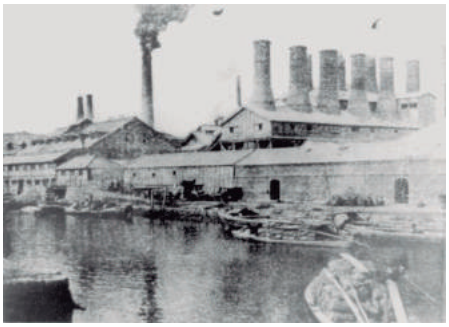
1878年（明治11）、郡区町村編制法により制定された東京15区の一つ深川区は、1947年（昭和22）に城東区と合併して江東区となる。

明治以降の深川は工場地帯へと変貌した。大名屋敷の跡地などにセメントや紡績、やがて重工業の工場が建設されたが、江戸期からの掘割は引き続き物資の運搬に使われた。関東大震災の被害を乗り越え、戦時中は軍需工場となり空襲にさらされる。戦後復興、高度成長の時代を過ぎると工場は地方や海外へ移転。跡地には次々と高層住宅が建設され、まちの様相は一変した。一部の運河も戦災の残土処理や水害対策で埋め立てられた。昭和50年代に進められた木場の新木場移転に伴い掘割が埋め立てられたのも水害対策の一環。「私が江東区で仕事を始めた昭和60年（1985）ごろ、木場公園一帯はまだ草ぼうぼうの野っ原でした」と久染さんは振り返る。

深川以南の豊洲・有明など臨海副都心の開発は現在進行中。このあたりは東京でもひときわ時代の変化にさらされているが、新旧住民の融和は進んでおり、「江東区はマンション住民が管理組合と別に自治会を組織している率が高く、地元の自治会と連携して行事で役割を果たしたり、新住民同士のチ

語り合う「cafe copain」オーナーの高橋幸子さんと久染さん

（上）江東区民祭りで披露される「木場の角乗」（提供:江東区広報広聴課）
（左）昭和30年ごろの福富川。今は親水公園として整備されている（提供:江東区教育委員会）



明治時代の浅野セメント工場（提供:江東区広報広聴課）

材木倉庫がひしめき合う木場の通り（現在の深川一・二丁目、冬木付近）。1926年（大正15）以前の撮影という（提供:江東区教育委員会）

ームワークもいい」（久染さん）という。

## 福 仙台堀いにしえの護岸があるカフェ

変わりゆくまちのなかで往時の記憶を未来へ引き継ぐ存在の一つが、埋め立てられず残った運河だろう。物資輸送の主役を陸路に譲り役目を終えても、「ザ クリーム オブ ザ クロップ コーヒー」の例で見たように新たな活気の呼び水となり得る。

木場公園の交差点、仙台堀川の北岸にある「cafe copain（カフェ コパン）」が、そんな思いを確信に変えてくれた❼。店内に入ると、吹き抜け天井で倉庫ふうの建物。店の奥、堀側のカウンター壁面下部のコンクリートは、なんとかつての堤防護岸そのままではないか。護岸を壁の一部として丸ごと残しているとは……。これには久染さんも驚いていた。

オーナーの高橋幸子さんは、シャッターの閉まった建物の堀側に向いた高窓を一目見て「運命的な出会いを感じ」、ここで店を開きたいと法務局で所有者を調べたがわからなかった。ダメもとで江東区平野の自宅近所の人に聞いたら判明。元は材木倉庫で工務店の廃材置場に使われていた。2015年（平成27）にオープンしたカフェは天井も梁も壁も掃除しただけで替えていない。昭和20年代の建造だが、筋交（すじか）いもしっかりしていて堅牢だ。

「木場だけにとても立派な木を使ってるからちょっとやそっとじゃ壊れないよと言われました」と高橋さん。

テレビや雑誌でよく紹介される「カフェコパン」は客足が絶えない。「気がついたらお客さん同士、おばあさんと若いママがSNSで友だちになっていたり」（高橋さん）と、人懐っこい下町風情も風雪を経た護岸とともに健在のようだ。

江東区で生まれ育った久染さんはこう語る。

「もともと豪農や大地主もいないから自由な土地だし、江戸時代から『一旗揚げてやろう』と人が移り住んできたまちだから、よそ者でも住みやすいのかな。たしかに時代とともにまちは大きく変わったけれど、そもそも変わるのがあたりまえと思う、そんな気風なのかもしれません」

役目を果たし終えたはずの掘割や材木倉庫が、今もなお新たな活気をもたらす深川。「運河や堀はこれからも残る」（久染さん）はずだから、はたして次はどんなことが起きるのか、楽しみでならない。

（2017年8月10日取材）

# 水辺を楽しむ大きなテラス

## LYURO（リュウロ）東京清澄

隅田川に面した2階部分は都内最大規模の広さ（86坪）の川床。公道と隅田川テラスの2カ所に通じる階段があり、誰でも出入りできる（提供：株式会社リビタ）

株式会社リビタ ホテル事業部ディレクターの岡田尚子さん（左）とLYUROスタッフの塚本由紀子さん（右）

**築28年のビルをホテルとしてリノベーションした「LYURO東京清澄」。2階にある広いテラス（川床）は、東京都建設局河川部の社会実験「かわてらす」によるもの。誰もが水辺の楽しさを実感できる新スポットだ。**

### 地域住民に開かれた都内最大規模の川床

「23区内でありながら、客室からこれほど間近に川が見えてゆったり過ごせる場所はなかなかないですよ」と話すのは、住宅のリノベーションなどを手がける株式会社リビタの岡田尚子さん。

2017年4月、隅田川沿いの清洲橋下流にオープンした「LYURO東京清澄」（LYURO）は、個室やドミトリーを備えたシェア型複合ホテルだ。事務所兼倉庫だったビルをリノベーションした。

隅田川に面した開放的なテラスは、宿泊客やレストラン利用者だけでなく、近隣に住む人が散歩ついでに立ち寄り、水辺で思い思いの時間を過ごすことができる。

### 清澄白河の新たな「出会い」の拠点

施設利用者以外にも開放されているこのテラスは、東京都の社会実験「かわてらす」（注）がもたらしたもの。目的は、「水辺の魅力のさらなる向上と地域の活性化によって『恒常的な水辺の楽しさ』をつくることです」と東京都建設局河川部課長代理の遠藤英樹さん（p15）は語る。

川は公のものなので、事業者にも公共性が、つまり地域への貢献が問われるのだ。「ちょうど物件のお話があった時期にかわてらすを知り、応募した」（岡田さん）リビタは、地域の人との合意形成を図るため準備段階で説明会を開く。

「近隣の方との話し合いはスムーズでした。この辺はレストランが少ないので『こういう場所ができるのはうれしい』と前向きにとらえてくださったからです」（岡田さん）。

オープンから早5カ月。「リピーターが増え、国内外問わず女性専用のドミトリーが特に人気です」とLYUROで接客にあたる塚本由紀子さんは言う。歌舞伎観劇の帰りに一人でドミトリーに宿泊する都内在住の女性もいるそう。

LYUROでは、近隣のクリエイターを招いたクラフトマーケットやテラスでの朝ヨガ、シャワーを開放したランイベントなど、休日を中心に催しを行なっている。

「テラスでのイベントを通じて清澄白河の魅力を発信して『LYUROに行けばおもしろいことをやっている』そう思ってもらえる場所にしたい」と岡田さんは話す。

LYUROは地域住民をはじめとする人々の新たな憩いの場、出会いの場として機能しはじめている。

（2017年8月28日取材）

**（注）社会実験「かわてらす」**

東京都建設局が、隅田川および日本橋川を対象に河川敷地を活用して飲食等の営業を行なう事業者を公募するもの。条件を満たした事業者は「かわてらす（テラス）」が開設できる（2016年度で募集は終了）。

# よそ者を拒まない「意気」なまち

編集部

## 江戸の人々の心のよりどころ

平日も観光客で賑わう浅草、その対岸の東京スカイツリー®をランドマークとする本所、ここ数年ぐっと人気が高まりつつある蔵前と深川。今回はこの四つのエリアを「イースト・トーキョー」と見なして今昔を探った。

浅草寺のご本尊は隅田川からすくい上げられたと伝わる。隅田川テラスの整備で水辺は再び身近になった。湿地帯の水を集め、運搬路でもあった掘割とその周辺に住む人たちの身分を越えた交流から文化が生まれ、かつての職人と問屋のまちは今も健在だ。掘割と昔の倉庫の思いがけない使われ方も見聞きした。隅田川・運河と人々の結びつきは予想以上に深く、今も生きていた。

隅田川は荒川放水路との分岐点・新岩淵水門から下流23・5㎞を指すが、かつては利根川水系だった。江戸初期に徳川幕府が行なった大規模な河川改修で付け替えられ、現在は荒川の分流と位置づけられている。

その名は『古今集』や『伊勢物語』など平安時代からさまざまな文献に見られる。春は桜、夏は花火、秋は月見、冬は雪景色と多様な表情を見せる隅田川に、武士も町人もこぞって出かけた。その光景は北斎、広重らが描いた浮世絵に残されている。

舟運の大動脈というだけでなく、隅田川は江戸で生きる人々の心のよりどころだったのだ。

## かつての記憶を消さないために

隅田川の夏の風物詩として有名な両国の花火は、1733年（享保18）5月28日、八代将軍吉宗が西国の凶作と江戸市中の疫病を退散するために行なった水神祭で、周辺の料理屋が花火を奉納したのが始まりとされる。

この花火は「川施餓鬼（かわせがき）」として打ち上げられたとも伝わる。川施餓鬼とは水死者の霊を弔うために催す供養の仏事で、川辺や川に船を浮かべて行なわれるもの。実は隅田川では今も続けられている。先代が始めた川施餓鬼法要を受け継いだという住職は「江戸の大火、関東大震災、そして戦災。隅田川ではたくさんの人が亡くなっていますね。小規模でも続けていくことに意味があると思います。PRはしません。通りがかった人が気づいてくれたらそれでいいのです」と語る。

川施餓鬼の一種に「流灌頂（ながれかんじょう）」があるとも聞いた。『笑うどくろ』（実業之日本社 1984）の著者で「流れかんじょうの幽霊」という話を書いた劇作家・演出家の岡崎柾男さんにお会いした。流灌頂は水死者だけでなく、お産で亡くなった女性のための儀礼でもあったそうだ。

「川の流れのきれいなところを選び、四本の青竹もしくは板塔婆を立て、縄を結んで白い布か赤い布を張ります。布が色あせたり、布に書いた経文が消えたり、布に穴が開くまで仏は浮かばれないと信じられていました」（岡崎さん）

通りがかった人に水をかけてもらうために、竹製のひしゃくも添えてあったという。水をかけることがすなわち供養なのだ。

## 江戸から受け継がれる義理と人情

流灌頂のように「水をかける」という行為は霊的なことにまつわる。

赤坂・日枝神社の山王祭、神田明神の神田祭と並ぶ江戸三大祭りの一つ、富岡八幡宮の例大祭は「水掛祭り」と呼ばれる。観衆が担ぎ手と神輿に「清めの水」を浴びせるのだ。今年は三年に一度の本祭り。私事だが、江東区の知人に誘われて担ぎ手として参加した。朝5時集合で終わったのは夕方5時近かった。担ぎ手が足りない時間帯もあるので、住民でなくても紹介者がいる場合に限り担ぐことができる。例大祭を続けるために、そういう寛容なしくみもあった。

神輿を担いで感じたのは、担ぎ手だけでなく、水をかける沿道の人たちも含めて、みんなのお祭りなのだということ。家の前で待ち構えてうれしそうに水をかけてくる子どもたちのなかから、次の担ぎ手は現れる。そうして何百年も続いてきたのだ。

もう一つ感じたのは、よそ者の私を練習会のときから快く受け入れてくれた江東区の皆さんの温かさ。担ぎ終えると飲み会にも誘ってくれる。でもしつこくない。これが江戸っ子の「意気」なのか。

今は粋と記されることが多い意気は、18世紀後半の江戸の町人文化に成立した美意識のことで、意気に基づく行動原理を通（つう）という。人情の機微を理解し、いやみなく見栄を張らない。

同じような感想をシエロ イリオの吉田浩介さんとNui.の桐村琢也さんも抱いていた（p23）。青森出身の吉田さんは「人が温かいところは青森と似ているけれど、蔵前の人の方がズバッと言いますね」、大分出身の桐村さんは「お酒を飲むと賑やかで気っ風（ぷ）がいい。面倒見もいいですが怒るときには怒ります」と笑う。よそ者を拒まない人情味がある一方、義理を欠くようなことには黙っていられない気質が見える。

概説をお願いした山本博文さんは「昔からの土地の気質や記憶は続いているもの」と言った（p7）。江戸からの下地があり、そこに若い人やよそ者が入り込んで新陳代謝が起きる。浅草でさえ人が寄りつかない時期もあったが、サンバカーニバルなど新しいイベントを導入して見事復活した。よそ者を拒まず、変わることを恐れない。だからこそ、人と人が次々とつながって、おもしろいことが起きているのだろう。

これからもイースト・トーキョーから目が離せない。

水の文化書誌 48

# 時を超えて 世界最長のナイル川

**古賀 邦雄**
こが くにお

**古賀河川図書館長**
**水・河川・湖沼関係文献研究会**

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

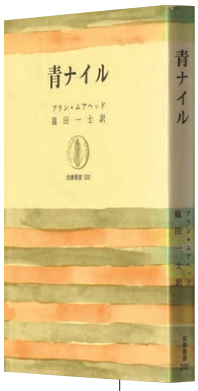

## ナイル川の船

私は2017年7月13日福岡市博物館にて、国立カイロ博物館所蔵「黄金のファラオと大ピラミッド展」を観賞した。古代エジプトの王たちは、ナイル川を利用し、船で石を運搬し巨大なピラミッドを造り上げた。

古代エジプト人は、太陽とナイル川を中心とする死生観をもっていた。東岸（右岸）は生者の世界、西岸（左岸）は死者の世界と考え、死者は必ず甦ると信じていた。そのことは、太陽は東から昇り、西へ沈む現象から、上エジプトのテーベの町は東側に造られ、そこに住んでいた王や貴族たちの墓、葬祭殿のすべては西側に設けられていることに現れている。また、神殿の天井画には太陽とナイル川に浮かぶ船が描かれている。このことは、日本人の死生観である此岸と彼岸に似かよっている。

アン・ミラード・文『絵で見るナイル川ものがたり』（さ・え・ら書房・2004）は、ナイル川の恵みである魚をとるパピルス船、木造船、アスワンの花崗岩砕石場の巨大な平底船、引き船、王宮使節の船、アメン神の御座船、巡礼者たちの船、奴隷の町・奴隷商人たちの船、ヨーロッパ商人の船を描く。

ディルウィン・ジョーンズ著『船とナイル―古代の旅・運搬・信仰』（學藝書林・1999）によると、古代エジプト人は、二つのタイプの船を開発したとある。一つはパピルス製の小舟で地方の沼地のような場所で漁撈や狩猟のために使われた。もう一つは木製の船で、長い船旅や重い荷物を輸送するために使われた。古代はもとより現代においても、その存在や発展のためにエジプトほど水上輸送に依存した文明はない。ナイル川の船は商業や軍事遠征、宗教儀式が行なわれた大動脈であった。また、船の所有は権威の象徴であり、造船は国王の重要な年中行事の一つであった。現在では、観光用のクルーズ船、日用雑貨を積んだ帆かけ船がナイル川を行き交う。




## ナイル川の探検

高橋裕編集委員長『全世界の河川事典』（丸善出版・2013）によれば、ナイル川は全長6690km、流域面積334万9000㎢、世界最長の川である。その源は地球上で一番小さな国の一つであるブルンジの小さな丘に発する。ここに1937年ドイツ人探検家ブルクハルトは「カブート・ニリ（ナイルの水源）」と刻んだ碑を建立した。ナイル川はブルンジから隣国タンザニア、ルワンダに流れ、東方へ転じヴィクトリア湖に入り、中央ウガンダを横断してアルバート湖に達する。さらに流下し、サッド（障害物という意味）の沼地に入る。スーダンの首都ハルツームでエチオピアのタナ湖を水源とする青ナイル川が合流する。この地点までを白ナイル川と呼んでいる。それからナイル川は右岸アトバラ川を合わせ、1970年に完成したアスワン・ハイ・ダム（ナセル湖）に流入し、さらに6km下流の1902年完成のアスワン・ダムに入り、それから700km下り、エジプトの首都カイロに達し、160kmにわたるデルタ地帯を下ると地中海に注ぐ。

17世紀までナイル川の源流は未知の世界であったが、18世紀はヨーロッパ人が植民地・領土拡大を図るためのナイル源流の探検を争った。1770年イギリス人ジェームズ・ブルースはエチオピアのタナ湖を青ナイルの源流と確認した。

ブルース著『ナイル探検』（岩波書店・1991）に、その源流を発見したことを淡々と述べている。この書は1790年ロンドンで刊行された探検記であるが、一方では18世紀における博物誌、民族誌、政治誌でもある。

アラン・ムアヘッド著『青ナイル』（筑摩書房・1976）には、ブルースが青ナイルの源流の最初の発見者ではない。それは、1618年ペドロ・パエズが青ナイルに達しているという。

同著『白ナイル―ナイル水源の秘密』（筑摩書房・1970）には、バー

トン、リビングストン、スピーク、グラントの白ナイル源流に挑む姿を捉えている。なお、バートンとスピークなどのナイル川源流を突き止める探検は、ボブ・ラフェルソン監督によって「愛と野望のナイル」（米・1989）で映画化された。

## ナイル川の踏査

野町和嘉著『The NILE―「生命の川・ナイル」6695キロ、最初の一滴から地中海まで』（情報センター出版局・1989）は、白ナイル（スーダン南部のディンカ族牧畜民、ケニアのマサイマラ動物保護区）、青ナイル（エチオピアのティシサット滝、同高原のアムハラ族の葬儀）、ナイル（ナセル湖畔の小学校、エレファンティン島のナイロメーター・水位計）を踏査した写真集である。

表紙の写真は、スーダン北部アトバラ付近の浅瀬を渡って家路につく農夫たちを写す。スーダンのハルツームで合流した二つのナイル川は、この先一滴の降雨もない灼熱の沙漠を一路地中海に向かって北上する。沙漠と水の接点で古代エジプト文明が開化した。序文を寄せたジェフリー・ムアハウスはナイル川の特徴を、これほど変化に富む自然環境、文化、多種多様な民族のあいだを流れる川、そして有史以来、その沿岸に住む人々に、豊潤と災難、生と死にかかわる人間の物質的な生活を決定的に左右してきた川はないという。

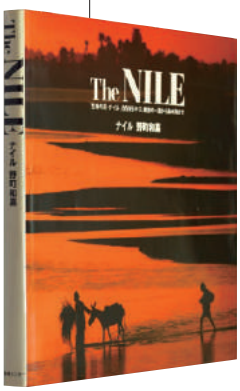
同著『ナイル河紀行』（新潮社・1996）は、前の写真集を網羅して、ナイル河の5000年の歴史を追う。まさしくエジプトはナイルの賜物である。

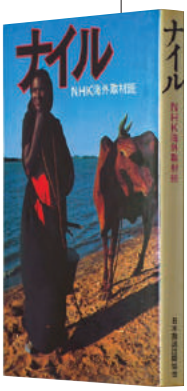
NHK海外取材班編『ナイル』（日本放送出版協会・1968）は、1967年に取材した大ナイルの流域に住む人々の記録である。ひらけゆくその源ウガンダ、高原の夜明けエチオピア、砂漠の民族スーダン、よみがえるエジプト アラブ連合1、緑のデルタ アラブ連合2の章からなる。

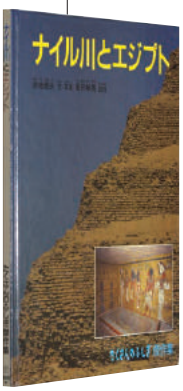
## ナイル川の人々の暮らしと自然

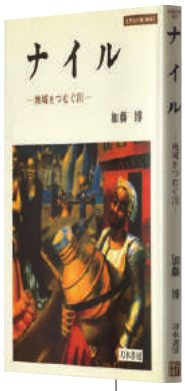
ナイル川の人々の暮らしと自然について、次のような児童書がある。

赤地経夫・文『ナイル川とエジプト』（福音館書店・1988）では、沙漠のなかのピラミッドやスフィンクスを造った古代エジプト人の偉大な文明をまず紹介する。人や家畜の飲む水、作物をつくる水もナイル川から汲み上げた。ナイル川は、毎年決まった季節に氾濫し栄養を含んだ土を上流から運んでくる。女性や子どもたちは素焼きの水瓶とバケツなどでナイル川の水を運ぶのが仕事となっている。水を汲み上げるシャドーフ、ダンブーラ、サキヤの道具を使っている。






E・B・ワージントン著『ナイル川』（帝国書院・1987）では、ナイル川の水を利用するには水量を測らなければならない。この水位を測り記録するのがナイロメーター。1年を4カ月の三つの季節に分け、ナイルが増水したとき、洪水のとき、水がひいて水位がもとの高さに戻ったときに分ける。肘から中指の先までの長さを1キュービット（1キュービットは約45㎝～55㎝）とし、ナイル川の水位が12キュービットしかないとき、作物は不作、飢饉に見舞われる。14キュービットなら食べ物は十分、16キュービットならすべての人々にふんだんに行きわたることを表した。すでに古代エジプトでは、土地等を測量するための幾何学が確立しているのに驚嘆する。

ジェリア・ウォーターロー著『ナイル川』（偕成社・1995）は、アスワン・ハイ・ダムのことも著している。ナイル川の氾濫を利用した、後述するベイスン灌漑では、年1回の作物栽培であったが、アスワン・ハイ・ダムが1971年に完成し、ダムによってナイル川の水量がコントロールされ、一年中必要に応じ水が畑に配水されるようになる。小麦、米、綿花、トウモロコシ、サトウキビなどの農産物が一年中栽培されるようになった。

## ベイスン灌漑・ナイル川の文化

エジプトの国土の96％が砂漠であり、4％が農地と居住地となっている。降水量は白ナイル、青ナイルの上流域は年間1400㎜以上に達するが、ナイル川の河口アレキサンドリアで250㎜、海岸から160㎞入るカイロで25㎜、さらに700㎞内陸に入るアスワンでは0・7㎜にすぎない。ナイル川の上流域の降水によって、ナイル川は毎年6月に増水し、9月にピークに達し、10月に減少する。11月から冬作物の大麦小麦の作付けを行ない、翌年3月～6月にかけて収穫される。ナイル川の水はスーダンやエジプトにとっては、国家の存亡を左右した。

リバーフロント整備センター編・発行『特集ナイル川（FRONT NO.184）』（2004）では、ベイスン灌漑が記されている。ナイル川の増水が始まって水位があるところまで高まると自然に水門からベイスン（水盤・池の意味）水路に流入し、ベイスンに水が入りはじめる。ベイスンに水が溜まると、水門を閉じてナイル川が減水を始めるまでそのままにし、この間ベイスンの土地は肥沃な土壌に変わり、水がひくと、この土地を耕作する。

灌漑については、鈴木弘明著『エジプト近代灌漑史研究―W・ウィルコックス論』（アジア経済研究所・1986）がある。

おわりに、小堀 巖著『ナイル河の文化』（角川書店・1967）、加藤 博著『ナイル―地域をつむぐ川』（刀水書房・2008）を掲げる。

魅力づくりの教え 9

土着ベンチャー

# ドチャベンが教える これからのイノベーション

秋田県南秋田郡五城目町

森林資料館のある高台から五城目町中心部を望む。中央やや奥は豪雨の影響で濁った馬場目川

左の地図:国土交通省国土数値情報「行政区域データ(平成29年)、河川データ(平成19年)、湖沼データデータ(平成17年)、海岸線データ(平成18年)」より編集部で作図

人口減少期の地域政策を研究し、自治体や観光協会などに提案している多摩大学教授の中庭光彦さんが「おもしろそうだ」と思う土地を巡る連載です。将来を見据えて、若手による「活きのいい活動」と「地域の魅力づくりの今」を切り取りながら、地域ブランディングの構造を解き明かしていきます。今回は、秋田杉の集積地として栄え、500年以上前から露天朝市が開かれている秋田県の五城目町です。

**中庭 光彦**

なかにわ みつひこ

**多摩大学経営情報学部事業構想学科教授**


1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策・観光まちづくり。郊外や地方の開発政策史研究を続け、人口減少期における地域経営・サービス産業政策の提案を行なっている。並行して1998年よりミツカン水の文化センターの活動にかかわり、2014年よりアドバイザー。主な著書に『コミュニティ3.0――地域バージョンアップの論理』(水曜社 2017)、『オーラルヒストリー・多摩ニュータウン』(中央大学出版部 2010)、『NPOの底力』(水曜社 2004)ほか。

## 秋田杉を集め、加工する拠点として

2017年7月、秋田県五城目町を訪れた。人口は9000人余り。生産年齢人口比率約50％、老年人口比率41・8％と、日本の将来を先取りしている土地とも言える。

秋田駅から車で約40分。八郎潟に注ぐ馬場目川（ばばめがわ）中流で富津内川（ふつないがわ）が合流するあたりに中心地がある。

ここが有名なのは五城目朝市だ。五百年前から定期市が開催され、今でも賑わっている。江戸時代には北前船で商人が輪島から漆器を運んできてもいた。材は秋田杉。久保田藩（今の秋田県）を治めていた佐竹氏は秋田杉を保護し、価値を高めた。五城目は秋田杉の集積地でもあった。この町内には今でも木材加工所、板金製作所があり、多くの匠を輩出した。

五城目町は、馬場目川上流域で切り出され、流されてきた木材を下流で受け止め集積し加工する地として、市もできた賑わいの地であった。

賑わう五城目朝市（上）。左は若者たちが自分でつくった品々を並べられる「ごじょうめ朝市plus+」 提供:五城目町

「姉妹都市ちよだ五城目交流館」館長の小林敏夫さん（左）と副館長の下田祐治さん（右）

## 自ら生産し売買する直接取引の場「朝市」

その五城目朝市は、現在2、5、7、0のつく日に開かれる。通常は周辺農家が生鮮品を中心に約40店が出店する。さらに市の日が日曜日にあたるときは、新たなチャレンジを志す地域の人々が気軽に出店できる「朝市plus+」となり、客足も伸びる。この朝市を楽しみにしていたが、当日は豪雨。それでも行ってみると10軒ほどは店を広げようとしていた。

雨を除けようと入ったのが「姉妹都市ちよだ五城目交流館」。東京都千代田区と五城目町は姉妹都市となっているのだ。古民家を借用し、朝市通りにあるカフェという趣きだ。ここで、館長の小林敏夫さんと副館長の下田祐治さんからお話を伺うことができた。名刺を見ると茨城県と埼玉県の自宅住所が記されている。小林さんは五城目出身で現在は首都圏に住んでいるが、五城目に行事があるときには手伝いのため戻ってくるという。この五城目の人的ネットワークをお聞きし、さらに五城目が木工業のまちで、その運送で馬との縁が強いことも伺った。

結局私は市を見ることができなかったのだが、町役場で手に入れた『五城目朝市・五百年』を見ると、広域の生産者が月約12回は売りにくる。今では大型スーパーも近くにあるが、この市は独自の賑わいを見せている。自分で生産し自分で売買する。直接取引の場が維持されているのだ。

## 学びと起業支援

さて、まだ雨降らぬ前日にお会いしたのが、五城目町地域活性化支援センター「BABAME BASE」に入居しているハバタク株式会社代表取締役の丑田俊輔（うしだ）さんだ。「BABAME BASE」は、2013年（平成25）に閉校した馬場目小学校を起業支援施設として活用したものだ。

起業支援施設というと、五城目町と姉妹交流がある千代田区の「ちよだプラットフォームスクエア」が有名で、全国の他の自治体も同様の施設をつくった。起業支援とは、文字通り仕事を起こしたい人たちに顧客や資金、情報などの仲介をすること。具体的には、起業志望者が情報を共有できるコモンスペース、安い賃料のレンタルオフィススペース、Wi-Fi環境、そしてこれがもっとも大事なのだが、起業志望者とさまざまな人々を結びつけるコーディネーターから構成されている。丑田さんは学生時代に「ちよだプラットフォームスクエア」の立ち上げにかかわり、卒業後に企業で働き、ハバタクを設立。さらに、五城目

五城目町はかつて秋田杉の集積地だった。馬場目川沿いには東北森林管理局の集積所があり、今も秋田杉が積み上げられている
同局米代西部森林管理署の許可を得て撮影・掲載

町の木でできた校舎に入居。今は、丑田さんを含む入居者が中心となったコミュニティが、起業を志す人たちを自発的に誘っている。

起業支援は都市部の方が成果を出しやすい。しかし、丑田さんは五城目町を選んだ。なぜそうしたのか。「五城目の特徴は、ご縁がつながるなかで新しい仕事が生まれていく『イナカ創業』のよさがあること。人の縁が閉じていない。閉じた競争にならないところがよい」と言う。「五城目に移住者は何人もいるが、ボスはいない。多層でゆるくつながっている」とも言う。

丑田さんの部屋・教室には、5年前に描いた事業コンセプトの図が黒板に今も描かれている。ハバタクという企業は「学ぶプログラムをつくることにより、起業支援、コミュニティ支援を行なう会社」と言えるだろう。事業は多岐にわたるが、小学生がさまざまな外国人と交流するプログラムや地域中小企業の構造を変えていくプログラムなどを行なっている。

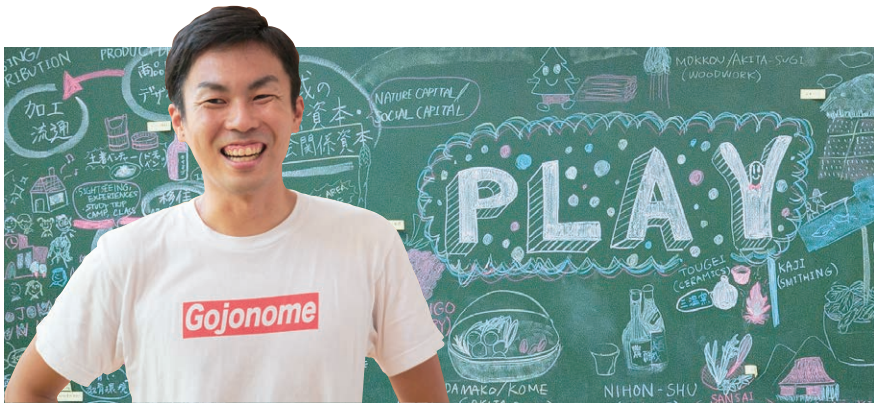
## 「ネットワーク村民」との交流が生み出すもの

丑田さんが大事にしているのは「創発性」だ。関係のなかで自然に生まれてくる知恵である。それに大きな役割を果たしているのが「シェアビレッジ町村」だ。

「BABAME BASE」から車で5分ほど離れた場所に、古民家を改修した宿泊施設シェアビレッジがある。この施設を利用するには村民となることが必要だ。といっても本物の村民ではない。五城目町を離れた人、関係はないけれどファンになった人を含めて年会費（年貢と呼んでいる）3000円払うと村民になれる会員組織だ。家守（やもり）は半田理人さん。隣町の井川町出身だ。

丑田さんは言う。「しょっちゅうバーベキューはしていますね。シェアビレッジにはさまざまな方が泊まりにくる。そこでいろんな話をします。東京に住んでいても村民は『町内会』にアクセスできるようになっています。2000名の村民がいますが、7割以上は首都圏に住んでいる。『一揆』と呼んでいる夏祭りには100名ぐらい帰ってきます。コアメンバーは300名ぐらいでしょう」。

こうした内と外の区別をつけない人々のネットワーク拠点を戦略的に設け、多頻度でイベントを行



ハバタク株式会社 代表取締役の丑田俊輔さん。東京都中央区のオフィスと行き来しながら、五城目町で「ドチャベン」の支援をする。後ろは「BABAME BASE」開設時に描いた「やりたいこと」

（上）起業支援施設「BABAME BASE」の外観
（右）1階入り口は「BABAME BASE」入居者たちのパンフレットや作品が並ぶ
（左）地域発の多様な事業を支援する柳澤龍さん

閉じないイナカにするための重要な拠点「シェアビレッジ町村」。〈村民〉は五城目町に所縁のない人が圧倒的に多いという。写真右は使い込まれた土間に立つ家守の半田理人さん

なっている。このシェアビレッジは起業支援に欠かせない大事な施設なのだ。

「シェアビレッジは補助金をもらわないように意図的に運営しています。もらってしまうと身動きがとれなくなってしまうので、なるべく民間資本でやっています。私は、トランス・ローカル（注）の関係をつくりたいし、ローカル・プロシューマーのネットワークを全国につくりたい」（丑田さん）

プロシューマーとは未来学者のアルビン・トフラーが1982年（昭和57）に出版した『第三の波』で使い出した言葉だ。トフラーは、新たな技術・情報体系が生まれると交換のための生産を行ない、生産者と消費者が分かれた社会から、生産者（producer）と消費者（consumer）が一体化した自給的な「生産的消費者（prosumer）」の社会が広がると唱えた。自分でつくり、自分で消費するという意味だ。このプロシューマーがつながった社会が、新しい発見を生むと丑田さんは考えているのだ。

## 幸福度をアップする「見守る大人」と「学ぶ子ども」

「BABAME BASE」には多くの若者がやってくる。東京大学大学院を卒業してここにやってきた柳澤龍さんもその一人だ。2014年（平成26）5月に地域おこし協力隊の一人として五城目町に移住して来た。

町の広報紙（2014・6・1）には移住当初の柳澤さんが「朝市に行くと山菜が詳しい人がいるとか、職人さんっぽい人が多い！（中略）山登りだったり、釣りだったり、家の中の部品を直しちゃう、とかも含めて『つくる』人ってカッコイイですね。（中略）市場というのは、昔からモノを売り買いするだけではなく、お互いの状況を気遣いあったり、情報が飛び交ったり、いろんな機能がある豊かな場なのだと思います」と、私には大きな意味を感じる発言をしている。

協力隊の任期を終え、現在はフリーランスとして株式会社ラウンドテーブル（BABAME BASEに事務所がある）を含め、人材育成、一次産業のコンサルタントを行なう。「今、目指しているのは、農業者が稼げるような食のレストランです。GDPは伸びていないけれど、幸福度は上がっていると感じられるような。そして、見守る大人と、学ぶ子どもが循環するような関係をつくりたい」と、地域発のさまざまな事業を支援する「複業」を行なっている。

## なぜイナカは魅力的に映るのか

さて、この連載も9回目となる。常識にとらわれないおもしろいイノベーターを紹介してきたが、なぜか地方都市や古くからのルールが生き残ってきた場所を活躍の舞台としている。

丑田さんもそうだ。自らは「土着のベンチャー」略して「ドチャベン」を支援したいと言う。そしておもしろいイナカ、「チャライナカ」にしたいとも言う。

なぜ現代のイノベーターはイナカ的な場、土着性を尊ぶのか。

私たちはついイナカを、不便な場と見なしてしまうが、実は、その場所でしか生まれてこない課題に対する解法、即ち土着的な知（indigenous knowledge）が今でも残っており、それがこれからの人口減少社会の知として刺激的なのだと映っているのではないか。それは都会で多くの人が常識とする知でもないし、他の場合にも応用できる知ではないかもしれない。その地でだけ通用する知だが、だからこそ多様なことは確かだ。これが私の仮説である。

ここには、土着の知を抽象化して全国展開するという発想は希薄だ。だから、ローカルが広がればグローバルになるといった同質的な世界イメージを、彼らはもっていない。「トランス・ローカル」、つまり異なる土着の知が全国に散らばり、その背景には境界と範囲があって、それらを結んだところに多様性があり、その先にイノベーションがあると思っている。

このことに気づくと「自分で生産し、自分で売ってみる」という生産的消費者を象徴し、ヨソ者との出会いもある朝市の文化がより魅力的になる。あえていえば、水の文化というものも、本来はそんな風土の知恵だったのだろう。

こうしたドチャベンたちは昔もいただろうし、中堅規模に成長しながら現在も土着の知を失っていない企業も多いだろう。そうした事業者が、これからの社会変化をどのように乗り切ろうとしているのか、気になるところだ。

### 〈魅力づくりの教え〉

その土地だけで見えてくる土着の知を磨き上げ、外と結びつけると、多様性が生まれ、土地のイノベーションの呼び水になる。

（2017年7月21～22日取材）

**参考文献**
五城目町市編纂委員会『五城目町史』（五城目町 1975）
秋田県五城目町『五城目朝市・五百年』（五城目町 1995）

**（注）トランス・ローカル**
グローバリズムではなく、多様な土地の知を保ちつつ、互いにつながっていくことを指す。

食の風土記 9

島豆腐（沖縄県那覇市）

# できたての熱々を味わう 島豆腐

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回はしっかりと食べごたえがあり、チャンプルーなどに多用される沖縄ならではの食材「島豆腐」を取り上げます。一丁が約1kgもあり、できたての温かな状態で販売される島豆腐とはどのようなものなのでしょうか。

チャンプルーをはじめとする沖縄料理に欠かせない「島豆腐」。かつて沖縄には家庭でつくった豆腐をおすそ分けする習慣があり、それが商いになったという

## 湧き水の多い地域で育まれた「島豆腐」

沖縄では、裸のままビニール袋に入った熱々の豆腐がスーパーなどで販売されている。密封すると熱がこもり豆腐が傷んでしまうため、袋の口は開いたまま。豆腐は戦前から各家庭でつくり食べられていたことから、沖縄の豆腐は今でも熱々の習慣が残る。この沖縄特有の豆腐を「島豆腐」という。「アチコーコー（熱々）」という沖縄の方言をとって、「アチコーコー豆腐」とも呼ばれる。

そもそも豆腐は、中世の朝貢貿易の際に中国（明）から製造法が伝わり、独自の文化に発展したとされる。

「豆腐は水が命だから、水の豊富な地域に豆腐づくりが栄えた」と話すのは、沖縄県豆腐油揚商工組合の理事長・久高将勝さんだ。

水を通しやすい琉球石灰岩（注1）の大地からなる沖縄には湧き水が多い。琉球石灰岩にしみ込んだ水がその下にある泥岩（でいがん）など水を通さない地層との境から流れ、湧き水となって出てくるのだ。

沖縄本島のなかでも、ウフカー（大川）やボージガー（坊主川）など五つの湧き水があり、水量も多かった那覇市の繁多川（はんたがわ）地区は豆腐づく

りに適していた。1965年（昭和40）ごろ、繁多川地区には53軒の豆腐屋があったとされる（今は3軒）。

実は、沖縄には家庭でつくった豆腐を隣近所におすそ分けする文化があり、それが徐々に商売として発展した。「最盛期には島内で500軒はあったでしょうか。大豆を挽くための石臼が一家に一台あるほど、豆腐はもともと身近な食材でしたから」と話す久高さんの家でも、サトウキビ栽培の合間に大豆を植え、豆腐をつくっていたという。

## 基本は守りながら新たな製法も

島豆腐には本土の豆腐と異なる点が多い。塩味がついていること、硬くて重いこと、そして基本的には温かい状態で販売されることだ。つまり、「しょっぱくて硬くて熱々」が本来の島豆腐なのだ。

島豆腐は一丁で約1kgあり、ずっしり重い（本土の豆腐は一丁約300～350g）。見た目も大きく、スーパーではたいてい半丁で売られている。適度な塩気も島豆腐の特徴だ。これはかつてにがりの代わりに海水を使っていた名残で、現在も島豆腐には約0・6%の塩分が含まれている。

型に入れた豆腐をプレス機や重しを乗せて水抜きするため、島豆腐は水分が少なく固い。ゆえに型崩れしにくく、チャンプルーやンブシー（味噌煮）などの料理に向いているのだ。ほどよい塩分があるため、そのまま味わってもおいしい。

製法にも違いがある。本土の豆腐は大豆を挽いた呉（注2）を煮てから絞る「煮とり法」だが、島豆腐は呉を絞ってから煮る「生絞り法」だ。最初に熱を加えない生絞り法はたんぱく質が生きた状態で残るため、島豆腐は本土の豆腐に比べてたんぱく質が約1・3倍と栄養価も高い。

しかし近年、労力や生産効率の問題から煮とり法に切り替える業者もある。繁多川で60年以上島豆腐をつくりつづける有限会社永吉豆腐加工所もそうだ。同社の永吉史弥社長によると、煮とり法への切り替えは10年ほど前のこと。「豆乳をつくるまでの工程のみ機械を入れて煮とり法にしました。豆腐は製法によって味や匂いが変わる

1パレットに並べられた島豆腐。この状態のまま、ビニール袋の口を開けて販売する。買う人は温かいかどうか袋に触れて判断する 2沖縄県豆腐油揚商工組合理事長の久高将勝さん。ご自身も以前は島豆腐を製造していた 3永吉豆腐加工所社長の永吉史弥さん。機械を導入して合理化を図りつつ、昔ながらの味も大事にしている 4永吉豆腐加工所の外観。首里城に近い、繁多川地区の丘の上にある

首里城に近い繁多川地区は湧き水が豊か。写真右は「ボージガー（坊主川）」、左は「ハンタガー（繁多川）」。水道が普及する前は、こうした湧き水を甕に汲んで頭に乗せ、坂道を歩いて運び、豆腐づくりに用いたという

できたての熱々を味わう島豆腐

**（注1）琉球石灰岩**

更新世（約258万年前から約1万年前までの期間）に海中のサンゴや貝殻などが堆積してできた石灰岩の地層。

**（注2）呉**

大豆を水に浸し、すり潰したペーストのこと。加熱して豆乳とおからに分離する。

繊細な食べもの。研究を重ねた結果、煮とり法で生絞り法の味を出せるようにしたのです」。

永吉豆腐加工所では、豆乳ににがりを入れた後に攪拌（かくはん）せず自然に固まるのを待つ。なぜなら攪拌することで空気が入り、豆腐の甘みを損なうことがあるからだ。「攪拌しない分、味にムラができやすいので、にがりを打てるのは経験を積んだ数人の職人だけです」（永吉さん）。

一方、型に入れて水抜きをしないで出荷するものは、「ゆし豆腐」と呼ぶ。みそ汁やスープの具として人気が高く、沖縄では昔から食べられている。

## 特例として認めさせた温かいままの販売

島豆腐は沖縄本島以外の離島でもつくられている。各家庭の味があるように、島によって少しずつ味や大きさが異なる。

『シマ豆腐紀行』の著者で、現在那覇市の栄町市場で古本屋「宮里小書店」を営む宮里千里さんによると、ブラジルの奥地やアルゼンチンでも、かつて移り住んだ沖縄の人々が島豆腐をつくっているという。「つくり方は、沖縄の昔ながらの生絞りの製法とまったく同じです。彼らは30kgもある石臼（ウーシ）を、船で運んで持って行ったのですよ」。島豆腐がいかに沖縄の人々の食生活に根づいていたかが窺える。

1972年（昭和47）の本土復帰の際、食品衛生法に基づき「豆腐の冷蔵販売」が義務づけられた。しかし、地元の食文化を守ろうと消費者および任意団体が団結して国に陳情した結果、沖縄県内で販売するものに関してのみ、特例として温かい豆腐の販売が認められた経緯がある。

「沖縄の年中行事の際の郷土料理には、ほとんど島豆腐が使われます。地域の食文化を大切にしたい想いが伝わったのでしょう」と久高さん。

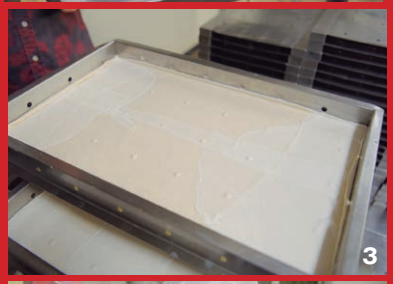
昨今の食の多様化と健康志向の高まりに伴い、永吉豆腐加工所は塩分量を0・03%に抑えた豆腐もつくる。ただし、これは「島豆腐」とは名乗れない。自治会の催しなどでは、地大豆を使って生絞りで製造した、昔ながらの島豆腐を子どもたちに食べさせるという。

沖縄の人々の食卓の定番である島豆腐。味わう際は、ぜひできたての「アチコーコー」で。

（2017年7月17～18日取材）

**1**
豆乳を鍋に入れて煮立て、にがりを打って凝固したもの（ゆし豆腐）をすくって豆腐箱に流し込む

**2**
押さえて水分を抜くために蓋をする。さらに重しを乗せる



**3**
圧力をかけて3時間ほど待つと「島豆腐」になる

**4**
豆腐箱をひっくり返して、中身を取り出す

**5**
丁寧に切り分けていく。縁に近い方が固めなので、チャンプルーに向いているという

できあがり！
**6**
ビニール袋に入れるが封はせず、このまま売り場へ。日持ちしないので一日に2～3回出荷し、同時に回収もする

古本屋「宮里小書店」を営む宮里千里さん。著書『シマ豆腐紀行』は南米やハワイ、アジアで見聞きした豆腐の話をまとめたもの

坂本クンと行く川巡り　第13回
Go！Go！109水系

# 山里の暮らしを縫い、平野の暮らしを紡いだ庄川

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の面々が全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人とのかかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。

**109水系**
1964年（昭和39）に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」（河川法第4条第1項）を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

## 20代最後の川巡り

庄川（しょうがわ）は大学時代に研究室のゼミ合宿で2013年8月に訪れた川です。4日間かけて、源流から河口まで巡りました。あれからちょうど4年。同じように上流から河口まで巡ってみました。以前とどんなふうに自身の川の見方に変化があったか、20代最後の総括として……。

川の風景というと、上流、中流、下流を思い浮かべる方が多いと思いますが、そうでない川もあります。庄川は全川の3分の2くらいが山間の風景が続き、残り3分の1の部分までくると一気に開けて平野風景に一変します。日本海側にはこういう特徴の川がいくつかあります。過去に紹介した黒部川もその一つですが、黒部川には山間に人の住める余地が皆無でしたが、庄川は山間でも暮らしが見える場面があります。今回はそんな庄川を巡りました。

## 階段のように連なるダム群

庄川の特徴は、なんといってもダム群です。上流の御母衣（みぼろ）ダムから数え、本川に9基ものダムが存在します。車で川沿いを下ると、ダム→ダム湖→ダム→ダム湖……

砺波平野を流れる庄川

白川郷の合掌造りの茅葺き家屋（右）。堂々とした たたずまいだ。上は防火用の放水銃を説明する白川郷道先案内人の上手重一さん

と連続していて、水面の高さを断面から線でつなぐと、階段のように連なっていることがわかります。庄川の急峻な地形と豊富な水が水力発電に適していたことから、電源開発が多く行なわれてきました。庄川を紹介するにあたり、ダム群なしでは語ることはできません。川だけ見ると、電源開発の川といえるでしょう。

## 山間の集落文化

世界文化遺産の地として知られている合掌造り集落（注1）の白川郷・五箇山（注2）ですが、庄川沿いにあることはあまり知られていません。白川郷と五箇山は同質の景観を有し距離も近いのですが、白川郷は飛騨の天領（現在は岐阜県）、五箇山は加賀藩領（現在は富山県）だったため結びつきが強い地域がそれぞれ異なっています。

白川郷道先案内人の上手重一さんは白川郷の合掌造りについてこう解説しました。

「切妻型の合掌造りは庄川沿いにしかありません。屋根の両端が本を開いて立てたように三角形になっているのが特徴で、積雪が多く雪質が重いという白川の自然条件に適したつくりになっています」

建物は南北に面して建てられています。これは風の抵抗をできるだけ小さくし、かつ民家（屋根）への日照時間を確保するための工夫です。夏は涼しく、冬は保温されるようになっています。庄川山間の気候風土に合った優れた建築様式です。

白川郷でもう一つ驚いたのが、充実した防火対策。上手さんは「火の用心たのんます。と言いながら、家々を日に3回も巡ります」とのこと。家々に防火用水設備を張り巡らせており、放水設備は59あります。11月上旬には冬場の火事予防に備えて、放水設備の一斉点検を行ない、放物線を描く水のカーテンは迫力があるそうです。

少し下って白川村を抜け、富山県に入ると五箇山地区です。

五箇山は合掌造り集落以外にも、「こきりこ唄」という民謡や「五箇山豆腐」の食文化が受け継がれてきました。五箇山は古くより浄土真宗が信仰されてきた地域で、親鸞聖人の法会に精進料理として五箇山豆腐が出されてきました。また、こきりこ唄とは日本でもっとも古い民謡で、竹を割いて束ねた民族楽器「ささら」で、囃子に合わせて踊ります。

どうしてこの山間の集落にこのような伝統や食文化が残ったのでしょうか。

庄川と流木の歴史を話す庄川水資料館の松村樹館長（上）。庄川美術館主任学芸員の末永忠宏さん（右）

上は五箇山の合掌造り集落の景色。円内は名産品の五箇山豆腐。縄で縛っても崩れない、しっかりとした硬さだ。この五箇山豆腐とこきりこ唄の保存に携わるのが岩﨑喜平さん（右）。左は「ささら」を手に踊りを披露してくれた大瀬輝夫さん

名産品の五箇山豆腐づくりとこきりこ唄の保存を行なっている岩﨑喜平さん（越中五箇山筑子唄保存会事務局長／喜平商店）は、「庄川は遡っていくと、長良川に出る。そこから川沿いを伝って、尾張まで出ていける。行き止まりでないというのが大きかったのではないか」と答えてくれました。

岩﨑さんのおっしゃるとおり、川を遡っていき、山を越えられないと人の往来は少なくなります。人が行き来することで、衰退せずに守られてきた庄川沿いの集落の豊かな文化といえるかもしれません。

## 庄川と流木の歴史

山間を抜ける庄川の歴史は流木の歴史でもありました。江戸時代から明治時代にかけて飛騨地方の庄川流域の雑木林は木材として使われ、庄川は日本海側に運ぶための川として使われていました。

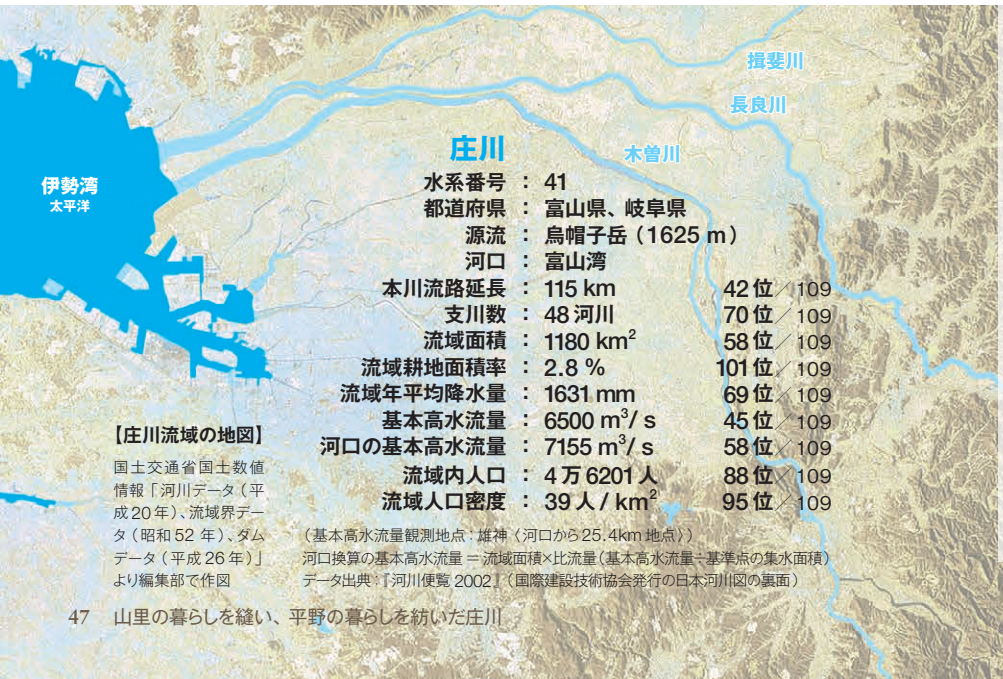
庄川美術館主任学芸員の末永忠宏さんは、「山から切り出した木材の運び方は、谷川をせき止め小さなダムをつくって木材を止めておき、堰を切って、水の勢いで一気に庄川に流します。これは『鉄砲出し』と呼ばれています」と当時の木材運輸について語ってくれました。

鉄砲出しの流れに乗って庄川本川に流れ出てからは、流送夫（りゅうそうふ）という人たちが、木材が引っかかって止まっていないか、確認しながら下流へと導く「川狩り」を行なっていました。このように、木材産業が山・川を一体として盛んな庄川沿いでしたが、突如、小牧ダムによる電源開発の話が持ち上がります。富山県の実業家の浅野総一郎によるダム開発が進行すると、木材で生計を立てていた人たちからは反対運動が沸き起こりました。これがのちにいう「庄川流木事件」です。

この事件について、庄川水資料館館長の松村樹さんは詳細を語ってくれました。「電力側は賠償金と、流木をダム湖から揚げるベルトコンベアの設置の補償を行ないました。しかし、木材側もわざとベルトコンベアの能力以上の木材を上流から流すなど、反発をやめませんでした」。この事件は小説（山田和『瀑流』（文藝春秋２００２））にも登場します。庄川の河川開発の歴史を語るうえで、重要な出来事の一つです。

## 庄川がつくった砺波（となみ）平野

庄川は山間を抜けると一気に開けます。ちょうど夕暮れ時、展望台へ上りました。黄金色に輝く、




**庄川**

| | | |
|---|---|---|
| 水系番号 | ： | 41 |
| 都道府県 | ： | 富山県、岐阜県 |
| 源流 | ： | 烏帽子岳（1625 m） |
| 河口 | ： | 富山湾 |
| 本川流路延長 | ： | 115 km　42位／109 |
| 支川数 | ： | 48 河川　70位／109 |
| 流域面積 | ： | 1180 km$^2$　58位／109 |
| 流域耕地面積率 | ： | 2.8 %　101位／109 |
| 流域年平均降水量 | ： | 1631 mm　69位／109 |
| 基本高水流量 | ： | 6500 m$^3$/ s　45位／109 |
| 河口の基本高水流量 | ： | 7155 m$^3$/ s　58位／109 |
| 流域内人口 | ： | 4万6201人　88位／109 |
| 流域人口密度 | ： | 39人 / km$^2$　95位／109 |

（基本高水流量観測地点：雄神（河口から25.4km地点））
河口換算の基本高水流量＝流域面積×比流量（基本高水流量÷基準点の集水面積）
データ出典：『河川便覧 2002』（国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面）

【庄川流域の地図】
国土交通省国土数値情報「河川データ（平成20年）、流域界データ（昭和52年）、ダムデータ（平成26年）」より編集部で作図


**坂本 貴啓** さん
さかもと たかあき

**国立研究開発法人**
**土木研究所 水環境研究グループ**
**自然共生研究センター 専門研究員**


1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室『川と人』ゼミ出身。博士（工学）。2017年4月から現職。

坂本さんに庄川について説明する国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所調査第一課長の池田大介さん（右）と専門官の奥井淳さん（中）。左は堤防を固めるために植えられたという「松川除け」の松

豊かな水を利用して古くから農業が発展した砺波平野（上）。散居村は田畑の開拓のために生まれた。左はとなみ散居村ミュージアム館長の川原国昭さん

砺波平野の田んぼのなかにぽつりぽつりと家が見えます。これは地理学では「散村」と呼ばれている農村の景観形態です。家とその周りの田んぼを一つのユニットとして、一つの世帯が暮らしを営んでいます。特に家の周りを取り囲む屋敷林は「カイニョ」と呼ばれ、杉を中心とした木々が強い南西風から家を守る防風林の役割を果たしています。

「屋敷林の管理が難しい高齢世帯などの剪定を支援したり、新婚世帯には屋敷林の苗木を提供するなどの補助を市の施策として行なっています」と語るのは、となみ散居村ミュージアム館長の川原国昭さん。人の住みやすさに景観は大きな影響力をもっています。砺波市が市町村住みよさランキング（注3）全国2位である要因の一つに砺波平野の秩序ある景観が守られていることも関係していそうです。

## 急流河川の治水の術

庄川の川筋は、時代を追って変化していきます。山間部を抜けると庄川は小矢部川に向かって流れ、次第に東寄りに流れを変えていきました。何本もの川筋が洪水を起こしながら土砂を運んでできたのが砺波平野（庄川扇状地）です。江戸時代の初めまで庄川は今より西側を流れていましたが、加賀藩は築堤で流れを一本化しようとします。

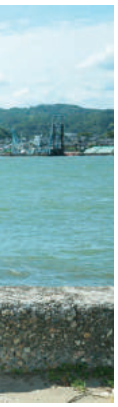
以前から小矢部川と合流して富山湾に注いでいた庄川は、明治時代になって小矢部川から分離され、新しく海に注ぐ河口ができます。

川筋の変遷について、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所調査第一課長の池田大介さんに聞きました。

「庄川は砺波平野を奔放に流れる川で、洪水のたびに流れを変えていました。そんななか、加賀藩によって、渓谷から平野に開けたすぐの扇頂付近に堤防がつくられました。堤防を固めるために松を植えたため『松川除け』と呼ばれ、弁財天付近の堤防では名残の松を見ることができます」

現在の堤防の上にも松の木が点々と見られ、当時庄川の西流する流れを締め切ったことをなんとなく感じとることができました。

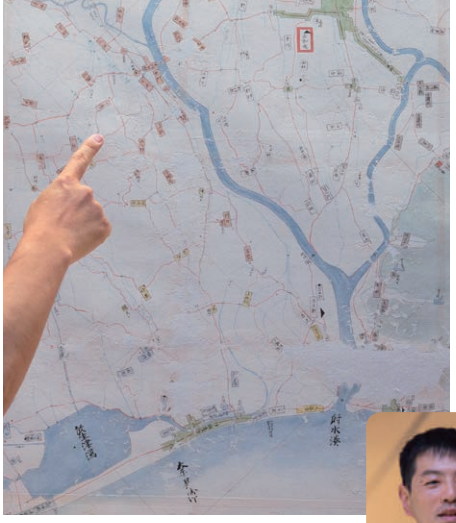
また、庄川沿いには霞堤が発達しています。本川に沿って二重三重に不連続な堤防があり、上流の堤防が決壊した場合でも、霞堤の開口部から氾濫流を受け入れ、河道に戻し氾濫被害が拡大するのを防ぐ優れた治水の術です。かねてこのような治水術がとられてきましたが、現在も急流河川において



2

1

取材当日の六渡寺の海岸。数日前に清掃が終わったばかりなのできれいな状態という。左はゴミの流れを説明する六渡寺自治会会長の境信誓さん



江戸期の地図に記されている庄川の流れ。今とは異なり、小矢部川と合流して海に注ぐ。左下にあるのはかつての放生津潟。右は射水市新湊博物館主任学芸員の松山充宏さん

は有効で、霞堤を庄川の平野の各所で見ることができます。

## 河口は流通の交差点

かつて庄川の下流を射水川、上流を雄神川と呼んでいました。江戸時代、射水川（庄川の河口付近）の右岸側は北前船がとまる港として栄えた放生津湊がありました。砺波平野でつくった米を放生津に集め、運び出す経済圏を確立していました。

射水市新湊博物館主任学芸員の松山充宏さんは、「放生津とその西にあった六渡寺の湊は、富山湾に沿って延びる浜往来と射水川が交差する交通の要地として、中世から発達していました」と語ってくれました。

江戸時代になると浜街道が主要な交通路として発達しているので流通は川に依存していないものの、上流から砺波の米が川ルートで運ばれてきて集積するという意味で、庄川の河口付近は富の集積地として賑わっていたことがわかります。

## 川ゴミの流れ着く先

川は海に注ぐまで、流域のゴミも多く運んできます。庄川の水は用水として使われた後、地形の関係で排水路を伝って小矢部川に流れ込みます。上流から徐々に集まってきたゴミは、庄川本川、小矢部川本川から富山湾に流れ込みますが、潮流と風の影響を受けその一部が河口付近の六渡寺の海岸に溜まります。そのゴミの量は年間約100トンにも及ぶそうで、地域の大きな課題でした。六渡寺海岸の清掃活動について、六渡寺自治会会長の境信誓さんに話を聞きました。

「今から10年前、一線を退いた人たちが8人くらい集まって、何か社会貢献をしたいと話し合ったのが始まりです。海岸の惨憺たる状況を見て、もう一度、泳げる海岸を取り戻そうと始めたのです」と境さん。

海岸の清掃とともに、ゴミの状況を上流の地域にも発信しました。月に1回、第3日曜日に行なう海岸清掃は、六渡寺の住民だけでなく、富山県の働きかけで、庄川、小矢部川流域の市町村から住民バスツアーが来るまでに発展してきており、年間約2600～3000人が河口のゴミの問題に向き合っています。

下流の問題を上流の人たちに伝え、上流の人たちが下流の問題を我が事として行なうことは、流域連携の理想的な形だと思います。

## 二度目の庄川を巡って

庄川をしっかり回ったのは二度目ですが、一度目に比べて、川の所々の暮らしに目がいくようになった気がしました。

庄川は、険しい山に隔てられ孤立したようにも見える山間部の村々をまるで糸で縫うようにつないでいました。そして美しい砺波平野も、庄川が開いた人々の暮らしを編み込んでつくった、華やかで大きな布地のように見えました。

昔、自身の師に109水系を巡った話をしていたとき、「川を一度見て、見た気になってはいけないよ。何度も訪れることで理解が深まる」と言われたことがありました。今回は前よりも深まったとは思いますが、30代でももう一度庄川を巡るとどんなふうに見えてくるのか、再々訪が楽しみです。

（2017年8月30日～9月1日取材）

1 水面がきらめく庄川。鮎を狙う太公望の姿も
2 人の手によって開削された庄川の河口
3 二度目の庄川巡りを終えた坂本さん。奥に見えるのは庄川河口と隣り合わせの小矢部川河口

**川名の由来【庄川】**

古名は雄神川。その後、雄神の床名より雄神庄川と称し、略されて「庄川」となる。飛騨地方では「白川」とも呼ばれる。

**（注3）住みよさランキング**

東洋経済新報社が全国の都市を対象に毎年公表している。2017年のランキングで砺波市は第2位。

# 「発見！水の文化」が始まりました！

Webで公開中！

ミツカン水の文化センターは、2017年から新たなイベント「発見！水の文化」をスタートしました。これまで開催していた「里川文化塾」を、もう少し身近で、より気軽に参加できる内容に一新したものです。まずは第一回「江戸の水辺街歩き（日本橋編）」、第二回「感性を刺激する滝鑑賞」の様子をご報告します。開催レポートはWebで公開中です。第三回以降もご注目ください！　http://www.mizu.gr.jp/hakken/houkoku/

## 第1回 江戸の水辺街歩き（日本橋編）

――2017年7月22日（土）13:00～16:30

**講師**：**斎藤 善之**（さいとう・よしゆき）**さん**　東北学院大学経営学部 教授

日本銀行と貨幣博物館に挟まれている駿河町

今も東京に残る「江戸の水路･掘割の跡」。それを巡ることで、江戸時代のまちづくりにおける「舟運・水」の重要性と、今に受け継がれている「水の文化」を再発見するため、日本橋～茅場町のエリアを歩きました。

案内役は東北学院大学経営学部教授の斎藤善之さんにお願いしました。当日の参加者は19名。7月の太陽の下、時折そよぐ風に癒されながらの散歩となりました。

「江戸の水路・掘割」といっても、今は埋められているところが多いため水辺だけではありませんが、浮世絵などを手がかりに、かつての姿を想像しながら楽しく学ぶことができました。

13:00 東京駅八重洲北口付近集合
↓
日本橋 日本橋室町エリア
↓
日本橋堀留町 小網町エリア
↓
日本橋兜町 茅場町 新川エリア
↓
16:30 茅場町駅 解散

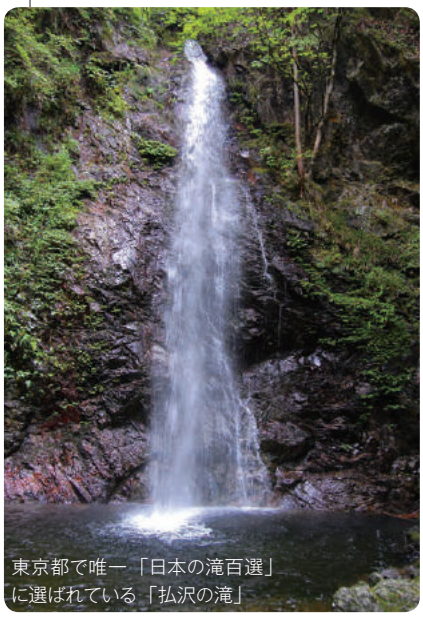
隅田川で佃島を背にしてまち歩きは終了

一石橋で解説する斎藤先生

## 第2回 感性を刺激する滝鑑賞

――2017年9月2日（土）、9月30日（土）13:00～16:30

**講師**：**坂崎 絢子**（さかざき・あやこ）**さん**　滝ガール



東京都で唯一「日本の滝百選」に選ばれている「払沢の滝」

13:00 JR武蔵五日市駅南口集合
↓
払沢（ほっさわ）の滝
↓
中山の滝
↓
16:30 JR武蔵五日市駅南口解散

音、しぶき、温度、流下する水の迫力あるビジュアル……滝にはさまざまな水の魅力がぎっしり詰まっていて、心の活力を回復するチカラがあるといいます。

そこで、東京から日帰りで楽しめる檜原村の滝を巡りました。檜原村は地形的に滝が多く、「はしご滝」も可能な場所なのです。

今回は、あまり知られていない滝の魅力を発信しつづける「滝ガール」こと坂崎絢子さんと一緒に滝を巡り、五感を刺激しながら心の回復力を得る滝鑑賞のヒントを教わりました。

思い思いのスタイルで自由に滝を楽しむ参加者たち

秋川の本流にかかる「中山の滝」。落差は1mなので滝の定義（注）からは外れますが、地域の人々は今でも滝と呼んで親しんでいます

（注）滝の定義
流水が急激に落下する場所で、落差が5m以上あって常に水が流れているところ

## 水の文化 Information

**■『水の文化』に関する情報をお寄せください**
本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。
ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

**■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。**
http://www.mizu.gr.jp/

**■水の文化 バックナンバーをホームページで**
本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

**■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで**
里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。また、今後の「発見！水の文化」についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

## 皆さまの感想をお待ちしています！

『水の文化』57号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。
http://www.mizu.gr.jp/form57.html

※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて下記へご返信いただく形でも結構です。
FAX：03-6685-7596
メールアドレス：tokyo-office@mizu.gr.jp

### 編集後記

取材中に「発見！水の文化」の下見もあり、深川や隅田川、江東区の掘割を集中的に歩き、クルーズして回った。感じたのは水辺のパワー。明日への活力をくれ、特に穏やかな掘割は優しく心に寄り添ってくれる。これが、江戸時代・現代問わず人々の原動力になっているんだな、と勝手に納得したのでした。（松）

夏の日、木場公園で散歩すると水が溢れているプールの中に、子供たちが丸太の上でグルグルと落ちないように足を動かしている。この地域の中心だった貯木場が東京の発達につれて移動させられたが、木場の面影が深川のあらゆるものに現れている。町中にあるコーヒーの香ばしい匂いには材木倉庫の再利用方法が見えたり、公園の小さなプールには、角乗の技術の新しい可能性が見えたりする。江東区民生活2年目の自分。雨の日の帰り道、木の匂いに囲まれるこの町が今回の取材のおかげで益々好きになってきた。（IM）

里川文化塾で染色を取り上げた際にも江戸のことを学ばせて頂いたが、本来「かつての江戸」と言えるのはイースト・トーキョーなのだと改めて感じた。私は地方出身者なので江戸っ子に少し憧れる。素晴らしい「粋」や「意気」が、どうか末永く受け継がれていきますように。（原）

私にとってのイースト・トーキョーは、隅田川の花火大会。中吊り広告が電車内に見られるようになると、夏を感じる。近年は浴衣を着て花火を鑑賞する人が多い。その時代その次代の楽しみ方がある花火大会。次はどのような楽しみ方があるのかワクワクする。（吉）

今回のエリアからは外れるが、別の企画で巡った旧中川は、都心とは思えないほど緑に溢れていた。水辺に近くなだらかにアプローチできる河川敷は、大勢の人で賑わっていた。東京だと開発や整備の印象が強いが、そういった柔軟さも江戸時代から続く気質なのか、東側の懐の深さを感じた。（力）

今回の特集は企画段階から多くの方々にご協力いただきました。「江戸時代の浅草を取り上げるなら新吉原遊郭を避けてはダメだよ」と背中を押してくださった民俗学者の神崎宣武さんをはじめ、皆さまに感謝しております。柴又帝釈天のそばで生まれた者として、この号が東京の東側に興味を抱く一つのきっかけになれば嬉しいです。（前）


ミツカン水の文化センター機関誌
**水の文化 第57号**
ホームページアドレス
http://www.mizu.gr.jp/

**発行**
**ミツカン水の文化センター**
〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル4F
株式会社 Mizkan Partners
Tel. 03（3555）2607　Fax. 03（3297）8578

**お問い合わせ**
**ミツカン水の文化センター 事務局**
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町 1-11-3 中銀NM・5F
Tel. 03（6264）9471　Fax. 03（6685）7596

**発行日**
2017年（平成29）10月

**企画協力**　（氏名50音順）
沖　大幹　東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄　水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信　法政大学教授
鳥越皓之　大手前大学学長
中庭光彦　多摩大学教授

**制作**
松本裕佳
Milana Irene
小林夕夏
原田朱野
吉田奈保子

**編集製作**
前川太一郎　編集
中野公力　デザイン・撮影
蔵田　豊　デザイン

**執筆**
秋山健一郎（pp.12-13）
佐々木　聖（pp.14-15、pp.24-33）
手塚ひとみ（pp.8-11、pp.16-17）
開　洋美（p.34、pp.42-44）
前川太一郎（pp.6-7、pp.18-23）

**撮影**
大平正美（pp.24-25、pp.42-44）
葛西亜理沙（pp.8-11、pp.14-15）
川本聖哉（pp.6-7、pp.12-13、pp.21-23、p.34）
鈴木拓也（pp.2-5、p.20）
中野公力（p.6）
藤牧徹也（p.16、p.18、p.21、pp.28-33、pp.38-41、pp.45-49）

**印刷**
中埜総合印刷株式会社


※禁無断転載複写

# ミツカン 水の文化センター

表紙：担ぎ手と神輿に「清めの水」が盛大に浴びせられる富岡八幡宮の例大祭。「水掛祭り」とも呼ばれる。2017年は三年に一度の本祭りで、氏子各町53基の大神輿が勢ぞろいする連合渡御（とぎょ）が行なわれた（撮影：川本聖哉）

裏表紙上：歌川広重（2代）『江戸名勝図会』より「真乳山」。隅田川右岸のかつての景色がわかる。正面が現在の「待乳山聖天」。小高い丘なので見晴らしがよく、多くの絵画や歌の題材となった。隅田川から奥に延びるのは「山谷堀」（国立国会図書館蔵）

裏表紙下：船上から見た隅田川左岸（駒形橋からやや上流部）。このようにリバーサイドへ窓を開ける飲食店や隅田川テラスを見ると、人々と隅田川が再びつながりはじめたことを実感する（撮影：鈴木拓也）